

堀 辰雄 管見―その一―

上 野 英 雄

まえがき

平成六年五月十四日、金沢大学大学教育開放センターにおいて、一般市民を対象に筆者は「リルケと堀辰雄―愛と死について―」というテーマで公開講義をしました。本稿はその講義メモを骨格にして成ったものです。

素性と幼少時代

「私は四つか五つの時分まで、父といふものを知らずに、或る土手下の小さな家で、母とおばあさんの手だけで育てられた。」（『幼年時代』¹）

堀辰雄の実父は堀浜之助といい、こうという本妻を国許の広島においたまま、裁判所の書記官として単身上京していた。その間に西村志気²という女性と浜之助のあいだに生まれたのが、堀辰雄です。

したがって、堀辰雄はこういう内縁関係で生まれた私生児ですが、堀浜之助の本妻³こうには子がいなかったので、辰雄を嫡男として届け出る。明治三十七年十二月二十八日の生まれです。

明治三十九年、堀浜之助の本妻⁴こうが上京することになったので、堀辰雄は母、西村志気につれられて堀家を去り、向島小梅町の志気の妹の家に身を寄せる。したがって、右の引用文中の「父」とは実父・堀浜之助のことです。ところが、

「突然私の父があらはれて、そんな侘住ひをしてゐた私や母を迎へることになった。」（同右⁵）

明治四十一年、母志気が辰雄をつれて向島須崎町の彫金師、上條松吉と再婚したのです。したがって、この「私の父」とは養父・上條松吉のこととして、堀辰雄は以後、長い間この養父を実父と思いこんで過ごします。

内気ではにかみ屋の男児だった堀辰雄は、幼稚園に入っても他の園児たちと遊ぶこともできず、少しだけ通園しただけで止めてしまふ。母志気はいわゆる教育ママだったので、小学校に入學すると毎

日、堀辰雄に付き添って登校し、授業の終わるまで教室の外で待っている。ある日の学校からの帰り道での母と子の会話のなかに、

「へもう明日からは一人で学校へお出……」

〈うん〉

〈……いいかい、お前の苗字を忘れるんぢやないよ……〉

〈うん……〉（同右）³

先生から父の苗字「上條」ではなく、「堀」と呼ばれるのがどうしてなのか。小学生の堀辰雄にはそれがどうしても分からず、「まるで自分の運命そのもののやうに、それをそのまま鵜呑みにしよう」と努力してゐた」（同右）⁴と回想しています。

また、『幼年時代』に改定し、削除される前の新潮社版『花結び』には左記の描写がある。

「小學校にはひつた當時、私を一番苦しめたのが自分の苗字であつたことは、前にも書いた筈だ。どうして自分だけがそんな両親とは異つた苗字なのか、それを内氣のために誰にもきかうとはしないので、私はただ一人で苦にやんでゐた。さうして他の同級生たちがはじめて覺えた自分たちの名前を教科書や帳面の上に得意になつて書いてゐるのに、私だけはまるで自分の名前が書けないかのやうに、それを書かずにゐた。頭の禿げた、好人物らしい受持の先生は、いつまでも署名のしてない私の教科書や帳面を取り上げて、先生自身で私の名前を書いてくれたりした。」（『花結び』）⁵

この「自分の運命」の謎について、つぶさに知らされたのは、母志氣が大正十二年に亡くなって上條家代々の墓に納骨され、さらに上條松吉が昭和十三年に死んで百ヶ日の済んだとき、亡母の妹から

です。その叔母は、堀浜之助が堀辰雄の実父であることを語り、母志氣については、「勝気でしつかりとした人、私（堀辰雄）のことだとすぐもう夢中になつてしまふ人」（『花を持てる女』）⁶だと評價する。けれども、堀辰雄によると、「さういふ年も身分もちがふその浜之助といふ人に、江戸の落ちぶれた町家の娘であつた私の母がどうして知られるやうになり、そしてそこにどういふ縁が結ばれて私といふものが生れるやうになつたか、さういふ點はまだ私はなんにも知らないのである。」（同右）⁷

ただし、新潮社版『花結び』には左記のように書かれている。

「私の母はまだ若いとき一時の身の過ちから、すでに本妻のあつた私の實父との間に私を生んだ後、その本妻には他に子がなかつたので私を名義だけ入籍させて貰つて、自分は何んの世話にもならず、そのまま幼い私をかかへて、おばあさんと二人で、例の土手下に小さな煙草屋をひらいて細々と暮らしを立ててゐたが、私が四つか五つのとき、こんど死んだ父と一緒にたのださうだつた。……そんな話を、父の死後、押上のをばさんが私にはじめて聞かせてくれたのである。」（『花結び』）⁸

ところで、堀辰雄の幼少時代の家庭生活において、母親からいかに可愛がられて育つたか。室生犀星の『我が愛する詩人の傳記』によると、

「十歳くらゐになると、お母さんは辰雄のことをうちの殿様と言つて、父親につけない日の刺身のご馳走を辰雄のお膳につけてゐた。夜、床にはいると辰雄の枕上を歩かないで避け、裾廻りをとほるやうにし、出世前の子供の枕上は歩かないものだ」と、お母さんは皆に

言つた。たとへば菓子くだもの類を貰ふと、第一番に辰雄に、おまへ、お食べかいと聽いてから家の者に、頒けてゐた。」(『我が愛する詩人の傳記』⁹⁾)

また、養父、上條松吉についても、同書によると、

「町内の顔ききでもあり、仕事の羽振りも宜かつたので、料理店の出入りから藝者の温習會などにも、肝煎役だつた。」(同右)¹⁰⁾

そんな芸者の踊りのつなぎとして、十歳の堀辰雄が鉢巻きをし櫛をかけた勇ましい姿で「ベンセイ・肅々夜河ヲワタル」の剣舞を舞う。美少年の剣舞はいつも好評だつた¹¹⁾といわれる。

注

(1) 角川書店刊「堀辰雄全集 全十巻」(編集委員 室生犀星・川端康成・河上徹太郎・中野重治 校訂 小久保實) 昭和三十八年―昭和四十一年刊行。以下、「堀辰雄全集 第巻」と略記する。

「堀辰雄全集 第六巻」九ページ。「幼年時代」は昭和十三年から十四年まで「むらさき」に連載。

(2) 同右 十ページ。

(3) 同右 四十九ページ。

(4) 同右 同ページ。

(5) 「堀辰雄全集 第六巻」三八三―三八四ページ。

(6) 「堀辰雄全集 第七巻」一九八一―一九九ページ。「花を持てる女」は昭和十七年、「文学界」に発表。

(7) 同右 一八九ページ。

(8) 「堀辰雄全集 第六巻」三八七―三八八ページ。

(9) 新潮社刊「室生犀星全集 全十二巻・別刊一卷」(編纂 三好達治・中野重治・窪川鶴次郎・伊藤信吉・福永武彦・奥野健男) 昭和三十九年―昭和

四十三年刊行。以下、「室生犀星全集 第巻」と略記する。

「室生犀星全集 第十巻」四四〇ページ。「我が愛する詩人の傳記」は昭和三十三年、中央公論社刊。

(10) 同右 同ページ。

(11) 同右 同ページ。

青年時代

大正六年、堀辰雄は牛島小学校を卒業し、東京府立第三中学校に入学します。中学時代は数学が好きで、未来の数学者を夢見ていたので、高等学校は一高の理科乙類(ドイツ語)に進学しました。そして「私(堀辰雄)」の両親は、私が彼等の許であんまり神経質に育つことを恐れて、私をその寄宿舎に入れた」(『燃ゆる頬』¹⁾)のでした。その寄宿舎の生活の一端について、堀辰雄は次のように述懐しています。

「寄宿舎は、あたかも蜂の巣のやうに、いくつもの小さい部屋に分れてゐた。そしてその一つ一つの部屋には、それぞれ十人餘りの生徒等が一しよくたに生きてゐた。それに部屋とは云ふものの、中にはただ、穴だらけの、大きな卓が二つ三つ置いてあるきりだつた。そしてその卓の上には誰のものともつかず、白筋のはひつた制帽とか、辞書とか、ノオトブックとか、インク壺とか、煙草の袋とか、それらのものがごつちやになつて積まれてあつた。そんなものの中で、或る者は獨逸語の勉強をしてゐたり、或る者はこはれかつた古椅子にあぶなつかしさうに馬乗りになつて煙草ばかり吹かしてゐ

た。私は彼等の中で一番小さかった。私は彼等から仲間はずれにされないやうに、苦しげに煙草をふかし、まだ髭の生えてゐない頬にこはごは剃刀をあてたりした。」(同右)⁽²⁾

こんな怪しい寄宿舎の生活のなかで、一年以上級の神西清と知り合つたこと。このことが堀辰雄の人生を文学へ向かわせる転機になります。神西清は周知のとおり、フランス象徴詩派の詩に親しんだ詩人・小説家・翻訳家ですが、一高時代は建築家を志して理科乙類に在籍したまま、フランス語は独学で学んだ人です。堀辰雄がこの文学青年に心底からいかに惹かれていたか。大正十二年三月十七日、堀辰雄が二十歳のときの神西清宛書簡の冒頭で、

「神西清！」

佛蘭西の匂ひ高い詩人よ！ 古風なるなみだの詩人よ！

藝術そのものの様な純粹の詩人よ！

詩のために、私は君を讚美し、祝福する。

君よ！ 私の魂よ！」(『書簡』)⁽³⁾

かぎらない敬意を表してから、「これからの手紙は、永久にとつて置かう」(同右)⁽⁴⁾と約束します。この約束どおりに、文字どおりの「刎頸の交友」が堀辰雄の死にいたるまでつづきます。が、青年時代の交友関係においてとくに注目したいのは、ブルースト、ジイド、コクトオ、ラジイゲ、ラムボオといったフランスの詩人への肉迫を、むしろ堀辰雄の方から神西清に期待した点にあります。因みに、堀辰雄はフランス語とドイツ語、神西清はフランス語とロシア語を原文で読み、翻訳もした人です。

ところで、堀辰雄は大正十二年、二十歳のとき、出身校である東京府立第三中学校の校長、廣瀬雄によって室生犀星を紹介される。この辺の事情について、室生犀星は左記のようにのべています。

「大正十二年五月、私は當時田端の高臺に住んでゐた。或日お隣の奥さんが見え、わたし共の主人の府立第三中学校出身に堀辰雄といふ生徒がゐるが、いちど紹介してくれと言はれてゐますので、會つてゐただけなかどうかといふお話であつた。私は何時でもと答へた。お隣は廣瀬雄校長であり第三中學に芥川龍之介も在學してゐたことがあり、堀は當時二十歳だつた。

或日お母さんに伴はれて來た堀辰雄は、さつま紺に袴をはき一高の制帽をかむつてゐた。よい育ちの息子の顔附に無口の品格を持つたこの青年は、歸るまで何も質問もしなかつた。お母さんはふつくりした餘裕のある顔附で、餘り話ができない人のやうだつた。」(『我が愛する詩人の傳記』)⁽⁵⁾

こんなにはにかんだ初対面の訪問であつたのに、この年の夏には早くも軽井沢に室生犀星を訪ね、初めて訪れた軽井沢の印象について、八月四日付、神西清宛のはがきのなかで、

「一日ぢゆう、彷徨つてゐる。みんな、まるで活動寫眞のやうなものだ、道で出遇ふものは、異人さんたちと異国語ばかりだ……ことに夜の主の彷徨は、たまらなくいい。僕の散歩のお友達は、舶來の煙草と詩人犀星だ。」(『書簡』)⁽⁶⁾

堀辰雄がはじめて訪ねた軽井沢の土地に嬉々として散歩を楽しんだのに、その散歩の友、室生犀星の方はどうだったろうか。

「輕井澤の景色とか小徑とかいふものの中で、おもに道路とか小

徑とかいふものに、僕はいたるところに行き止まりを感じ、この頃すぐに引き返すやうな氣になつた、堀辰雄が邪魔をするからだ、何處にも堀はぶらぶら歩いてゐて、笑ひながら出てくるとおもへば、それに類した氣になつてしまふからである。そんな氣にならないときでも、好きな川べりを行つてもちつとも面白くない日があつた。つまり輕井澤の景色に僕はもう飽きてゐるのかも分らない、氣候を愛しても平凡無味な林の小徑なぞ、青くさいばかりで好きになれないのである。」（『詩人・堀辰雄』）

同年十月には室生犀星がしばらく金沢に帰郷することになり、帰郷前に堀辰雄はその室生犀星によつて芥川龍之介を紹介されます。

この辺の経緯について、室生犀星の記述によると、

「震災の翌月、いまからもう三十年も前だが、私は灰じんの東京に居苦しい氣になり一年ほど郷里にかへることにしてゐたが、ある日荷物をまとめてゐる私の家に同じ田端にゐる芥川龍之介君がきて突然、辰ちやんこをあづからうかといつた、辰ちやんことは、堀辰雄のことで、芥川君はいつも堀君のことを辰ちやんこといつてゐた。當時、二十歳くらゐの紅顔の堀君には、堀君といふよりも辰ちやんこといつた方が、いかにもこの美青年の感じをよく現はしてゐた。私の家でも芥川君はよく會つてゐたし、二三度芥川君の家にも堀君は訪ねてゐた。

「君が何かとみてくれると好都合だ。」

「留守中あづからう。」

芥川君の預からうといふ意味は芥川の書齋にしたしく出入りさせるといふ意味である。この話を堀君にすると、堀君は大へん喜んで

それ以来芥川君の家に、つまり書齋に出入りしてためになる雑談の中で勉強するやうになつた。」（『堀辰雄を悼む』）

芥川は堀辰雄にたいして、自分の書架にある本は遠慮なしに使うように、と当初から愛弟子の処遇をする。大正十二年十月十八日付の堀辰雄宛の手紙において、

「……わたしは安心してあなたと芸術の話の出来る氣がしました……なほわたしの書架にある本で読みたい本があれば御使ひなさいその外遠慮しちやいけません又わたしに遠慮を要求してもいいけません」（『書簡』）

芥川はしかし、弟子の堀辰雄にたいする忠告も怠らない。これは多分、『不器用な天使』¹⁰を読んでからの忠告と思われませんが、大正十四年七月二十日付けの堀辰雄宛の手紙において、

「……この前君の見せた小説でもハイカラは可成ハイカラだ。あれ以上ハイカラそのものを目的にするのは君の修業の上には危険だと言ふ氣がする。君はどう思ふ？」（同右）¹¹

當時の文壇の二大巨星と師友關係ができたことで、この年は堀辰雄の生涯において画期的な幸運の年でした。けれども、堀辰雄の私生活においては極めて不運の年だつたと考えなければなりません。というのは、同年九月一日の関東大震災に遭遇し、生母志氣が避難した隅田川で水死したのです。堀辰雄もこのショックのためか、あるいは薄汚い寄宿舎の生活のせいか、肋膜炎に罹つて一高を休学します。これを心配して、金沢に滞在中の室生犀星は大正十二年十月十九日付、左記の見舞いと激励の手紙を差し出します。

「手紙を見て君にやはりお母さんが居られたらいいと考へてゐる。

とにかく學校はやりたまへ、そのうちこちらへ出かけて來たまへ、まだ僕も落着いたやうな落着かない氣もちであるが……」(『書簡』⁽¹²⁾さらに同年十一月三十日付の繪葉書で、

「來たいと思つたら何時でも來たまへ、汽車賃だけ持つて來たまへ、落葉の下から水仙が伸びてゐる古い町だ。」(同右)⁽¹³⁾

こういう師の言葉に甘えて、堀辰雄が金沢に室生犀星を訪ねたのは、翌年(大正十三年)七月。室生犀星の日記によると、

「七月二十二日

…堀君東京より來る。…朝子に人形や夏のちゃんちゃんをおみやげに呉れる。」(『日記』)⁽¹⁴⁾

とある。金沢に三週間ほど滞在し、堀辰雄が裸かで犀川を泳いだときの様子について、

「犀川をすぐ前にした川岸町といふ川べりの家で、茶の間で着物を脱ぐと、そのままの裸で、すぐ前の大川にはいつて泳いだ彼は、泳ぐことのうまいのに、泳ぐことを知らない僕を関心させた。」(『詩人・堀辰雄』)⁽¹⁵⁾

大正十四年、堀辰雄は第一高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部国文科に入学します。そして、この年に発表した小説『ルウベンスの偽画』、昭和五年の小説『聖家族』、昭和四年の卒業論文『芥川龍之介論』。この一連の著作は芥川を中心としながら、片山広子(筆名・松村みね子)とその娘総子(筆名・宗瑛)、堀辰雄に深く関わっています。

堀辰雄が片山広子をはじめ知ったのは、大正十三年の夏、金沢

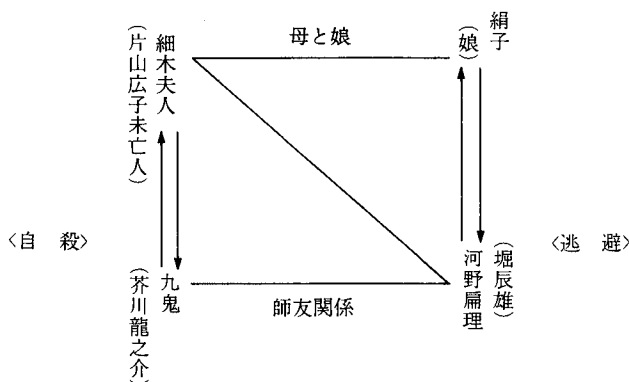
に室生犀星を訪ねての帰途、軽井沢の芥川龍之介のところへ寄ったときのこと。片山広子は佐佐木信綱に師事した歌人で、アイルランドの戯曲の翻訳者としても著名な未亡人です。堀辰雄はこの年の八月から九月初旬まで軽井沢に滞在したことで、はからずも芥川とその晩年の恋人として知られる片山広子との恋の数少ない目撃者の一人になりました。のみならず、片山広子の娘、総子と自分のあいだに生まれた恋愛関係に恐怖を感じていたりします。その辺の事情を知るために、まず『ルウベンスの偽画』⁽¹⁶⁾の内容に触れてみます。

この小説の舞台は軽井沢。季節は秋。主人公の彼(堀辰雄)はひそかに「ルウベンスの偽画」と呼んでいた彼女(総子)を時折その別荘に訪ねる。ある日、その庭園のなかを歩いていた二人は、露台の上から彼らの方を見下ろしていた彼女の母(片山広子)に気づいて思わず顔を赤らめる。翌日、彼女たちは彼を誘って浅間山の麓のホテルまでドライブする。その車中の沈黙、ホテルのバルコニーの下の屋根に出るからの彼女のしぐさが彼を奇妙な不安状態にする。「彼女が何でもなかったのに滑りさうな眞似をして指環が彼の指を痛くするほど、彼の手を強く握むかも知れない」(『ルウベンスの偽画』)⁽¹⁷⁾といった空想からの不安。しかし、翌朝になると、その不安が魅力になって彼女の別荘を訪ねる。

たまたま、この土地に絵を描きに來ていた彼の友人が、ここは空氣があんまり良すぎるので、遠くの木の下でも、一枚一枚はつきり見えてしまう。そのために、描きかけたままの風景画をたずさえて、明日は東京へもどるといふ。これを聞いて、彼(堀辰雄)もまた、

自分と彼女の関係が思うように進行しないのは、この空気が良すぎて、どんな小さな心理でも、互いにはつきり見えてしまうからかもしれない。自分も「ルーベンスの偽画」(彼女をこのままにして、再びここを立ち去るかもしれない、と考えるにいたる。

芥川龍之介が自殺したのは、昭和二年七月二十四日未明、田端の自宅においてですが、その告別式の場面から始まる小説『聖家族』¹⁸。この小説の登場人物と愛の方向を↓記号で示すと、下図のようになります。



店に案内し、気持ちを静めさせてくれた一人の青年。それが河野扁理という青年で、九鬼の弟子であり、かつて軽井沢で細木夫人に会ったこともある。夫人は式場の混雑と頭の混乱のために、このまま帰らなければならない。

告別式後のある日、扁理は九鬼の遺族から蔵書の整理を頼まれる。その仕事中に扁理はふと一冊の古びた洋書の間に手紙の紙片が挟まっているのに気づく。そこには女性の筆跡で、

「どちらが相手をより多く苦しますことが出来るか、私たちは試して見ませう……」(『聖家族』¹⁹)

これが細木夫人の筆跡であったことは、その後日、河野扁理あてに届いた同夫人からの手紙によって判明する。その手紙は、扁理が九鬼からもらった「ラファエロの画集」が古本屋に出ているのを夫人の娘、絹子がたまたま見つけたので、これを早速買い戻しなさい、といつて為替まで封入されている。

夫人の指示にしたがって、扁理はその画集を買い戻し、これを夫人に見せに行ったのがきっかけで、次第に扁理と絹子の間柄が深化して行くのに気づき、自分も九鬼の二の舞に陥るのをおそれる。というのも、九鬼の自殺について、扁理は次のように考えていたからです。

「この人もまた九鬼を愛してゐたのにちがひない、九鬼がこの人を愛してゐたやうに。……しかしこの人の硬い心は彼の弱い心を傷つけずにそれに觸れることが出来なかつたのだ。丁度ダイヤモンドが硝子に觸れるとそれを傷つけずにはおかぬやうに。」(同右)²⁰

こんな恐怖心から、扁理は夫人と絹子から遠ざかるように、ある

カジノの踊り子と交際をはじめ。ところが、その昼のデートが偶然にも、車でドライブしていた夫人と絹子の目にとまる。扁理は自暴自棄の態で旅に出る。旅先の海岸で、漂流物のなかに一匹の犬の死骸があるのを見つめているうちに、死の影が自分のなかにも、九鬼の場合と同じく潜んでいたのを実感する。

一般に二十四、五歳までを青年時代と見なすのが社会通念ですが、堀辰雄は二十五歳で東京帝国大学を卒業しています。したがって、その卒業論文『芥川龍之介論―藝術家としての彼を論ずる』⁽²¹⁾を青年時代の重要な著作の一つと考えなければなりません。

この論文は、堀辰雄が師の人間と作品を十分に知り尽くした上で感情に流れず、冷静に芥川の死にいたるまでを追求した学術論文です。堀辰雄は、芥川を「鋭い理性と共に柔かい心臓の持ち主」(『芥川龍之介論』⁽²²⁾)と評し、他方において「彼の本に對する情熱は、その上に、彼を(雑駁に)した」(同右)⁽²³⁾という。そして「雑駁」という語は、あらゆる大作家は雑駁である、という意味で芥川自身が使った言葉だと付言する。堀辰雄がポオドレエル、ゲエテ、トルストイらの大作家を引き合いに出してから断定した言葉によると、

「彼の中で、鋭い理性と柔かい心臓との調和が破れ始めたのを彼の第一の悲劇とすれば、この(雑駁さ)の調和の破れ始めたのは彼の第二の悲劇である。」(同右)⁽²⁴⁾

この「第二の悲劇」はしかし、芥川をポオやポオドレエルの魅力に一層強く引きつけ、芥川の作風を変える動機になっている。前期の作品において話らしい話のある小説ばかり書いてきたことに対する

る悔恨、自己嫌悪。それが『文藝的な餘りに文藝的な』(昭和二年)という芸術論を書かせ、後期の話らしい話のない小説を書かせている。具体的な作品としては、『蜃氣樓』、『玄鶴山房』、『齒車』、『西方の人』、『闇中問答』、『或舊友に送る手記』、『十本の針』、『或阿呆の一生』などがそれである。

孤独で、自尊心が強く、病身で、人間のなかに善よりも美を追求した芥川。彼は「わたしが人生を知ったのは、人と接觸した結果ではない。本と接觸した結果である」(同右)⁽²⁵⁾というアナトール・フランスの言葉を信条として後期の作品を書いた。そこにはしかし、自己を告白せずにはいかなる表現もできない、という考えとの自家撞着がある。「第二の悲劇」が芥川の神経を擦り減らした所以である。「第一の悲劇」は彼の自殺の原因につながるものですが、師弟の立場にある堀辰雄は、この卒業論文においては師の私生活に立ち入ることを避けています。

注

- (1) 『堀辰雄全集 第二巻』二四二ページ。
- (2) 同右 二四二ページ。
- (3) 『堀辰雄全集 第九巻』九ページ。
- (4) 同右 十三ページ。
- (5) 『室生犀星全集 第十巻』四四〇―四四二ページ。
- (6) 『堀辰雄全集 第九巻』十六ページ。
- (7) 『室生犀星全集 第九巻』三三六ページ。
- (8) 『室生犀星全集 第十一巻』四〇九―四一〇ページ。
- (9) 岩波書店『芥川龍之介全集 全十二巻』(一九七六年、吉田精一・中村真

- 一郎・芥川比呂志 編集。以下、「芥川龍之介全集 第 卷」と略記する。
- (10) 「芥川龍之介全集 第十一卷」二八八―二八九ページ。
 - (11) 「堀辰雄全集 第一卷」九十七―一六六ページ。
 - (12) 「芥川龍之介全集 第十一卷」四〇〇―四〇一ページ。
 - (13) 「室生犀星全集 別巻」三五四ページ。
 - (14) 同右 同ページ。
 - (15) 「室生犀星全集 別巻」三三七ページ。
 - (16) 「室生犀星全集 第九卷」三三五ページ。
 - (17) 「堀辰雄全集 第一卷」七十五―八十九ページ。『ルーベンスの偽画』は昭和四年、「創作月刊」に発表。
 - (18) 同右 八十ページ。
 - (19) 「堀辰雄全集 第二卷」一八六―二〇六ページ。『聖家族』は昭和五年、「改造」に発表。
 - (20) 同右 一九二ページ。
 - (21) 「堀辰雄全集 第一卷」一一七―一五九ページ。
 - (22) 同右 一二二ページ。
 - (23) 同右 一二三ページ。
 - (24) 同右 一二四ページ。
 - (25) 同右 一二〇ページ。

プルウストの影響

大学卒業後の三年間は病床の生活が多く、その病床生活において堀辰雄はプルウストの読書に熱中します。堀辰雄がプルウストの生涯の大長編『失はれた時を求めて』に関心をもったのは、すでに学

堀 辰雄 管見 上野英雄

生時代のこととして、昭和三年八月三日付、札幌に滞在中の神西清宛の手紙のなかに、

「ソレカラ PROUST ヲ早く君ノ物ニセヨ

彼女ハソレカラニセヨ

・・・

僕ハ忠告シタイ

君ガ寧ロ PROUST ト心中スルコトヲ」(『書簡』⁽¹⁾)

また、昭和六年五月五日付、葛巻義敏宛の手紙においては、

「僕は小説の要点は *légèreté lourde* (重たい軽さ) にあると信じてゐるよ。プルウストなど實によくそのポイントをつかんでゐるからな。僕は君にプルウストの『*Jeunes filles*』を読むことをすすめている。」(『書簡』⁽²⁾)

こういう手紙から、小説の要点とは何か、という根本的な問題を熟知するために、プルウストに傾倒していった状況が推察されます。『プルウスト雑記』⁽³⁾は神西清宛の書簡体で書かれていますが、そのなかでプルウストの難解な文章に苦勞した様子が次のように述べられています。

「プルウストの小説は、他の作家のものがすべて時や分を記述するのとは異り、秒を記述してゐる…。一日に一頁讀んだだけでも大抵がつかりする。とても、どの一冊だつて始めから終りまで通讀しようなんといふ気にはなれない。だから僕は手あたり次第に一冊引っこ抜いては、出まかせに開けた頁を讀むことにしてゐる。かうして讀むと割合に倦きずに讀める。」(『プルウスト雑記』⁽⁴⁾)

いかにも遅々たる読み方ですが、プルウストがリルケと同じく堀

辰雄の晩年までの愛読書になったことは、彼の晩年の書簡から見届けられる。たとえば、

「毎日ベッドの中でプルウストを読んでもありますが、いまの僕にはこれが何よりの贅沢です」(中里恒子宛、昭和十九年八月九日、堀辰雄四十一歳)。⁽⁵⁾

「このごろは一日ちゆう痰に苦しめられてゐます、わづかな時間だけプルウストを読んでもゐます」(谷田昌平宛、昭和二十六年五月二十五日、堀辰雄四十八歳)。⁽⁶⁾

角川書店版「堀辰雄全集」第三巻の二四四ページから三一四ページまでの「プルウスト」I―IXのノートは、『失はれた時を求めて』を読みながら、堀辰雄が自分の創作の参考のためにメモしたものと考えられます。このほかに堀辰雄がプルウストについて書いたものとして、右記の『プルウスト雑記』(昭和七年)をはじめ、『文学的散歩——プルウストの小説構成』(昭和七年)、『プルウスト覚書』(昭和八年)、『フローラとフォーナ』(昭和八年)を挙げることであります。こういうエッセイのなかから、プルウストの小説の要点として堀辰雄の把握した魅力を要約すると、次の二点に絞られるのではないのでしょうか。

その一。いま自分の前にいる一人の人間が、ちよつと時間が経つと、まるで違つた人間のように印象されてくる。そのことが、われわれには時間の過ぎつつあることを感じさせる。プルウストはこれを人物描写のなかにとり入れた作家である。

その二。描写の密度。各ページのなかに夥しい量で塊まり合つてゐる感覚、印象、感動。「恐らく現実がかくも繊細な、かくも精密な

方法で透視されたことは未だ嘗つてあるまい。」(『プルウスト雑記』)⁽¹⁰⁾

また、プルウストの小説の構成の特徴については、『文学的散歩』のなかで、パンジヤマン・クレミユの『二十世紀』の批評を紹介しながら、次の三点を挙げています。

第一はピラミッド式。作品の中心をなす主題が、ルネッサンス期の大画家の用いたピラミッド式構図によつて展開していく。

第二は薔薇窓式。第一のピラミッド式が小説全体の様式であるのにたいし、これは小説の枝葉に関するもので、各枝葉が思いもよらぬ複雑な方法でたがいに連続的に結びついている。

第三はワグネル式。登場人物のライト・モティーフがまだはつきり示されていないうちに、他のライト・モティーフの中に溶かされつつ音楽的に誘導される。

ところで、プルウストのこういう小説構成を学びながら、堀辰雄がその影響を受けて書いた作品として、『恢復期』(昭和六年)、『美しい村』(昭和八年)、『物語の女』(昭和九年)が挙げられます。そこでまず、『恢復期』について紹介します。

この小説は「彼」(堀辰雄)が肋膜炎の療養のため、Y岳山麓の高原療養所へ向かう寝台車のなかでの、夜ふけの場面からはじまる。二部から成り立つ私小説風の作品で、第一部の舞台は右記の高原療養所での生活風景。第二部は医師から外出の許可をもらつて、軽井沢の叔母の「羊齒山荘」へ行き、ここに滞在して浅間山の噴火の音に驚いたりする。格別のあらずじらしいあらずじのない小説ですが、

療養所で不眠と幻聴に悩まされ、神経衰弱気味の「彼」はブルウスの影響もあってか、きわめて緻密な感覚で自然と周囲の人間を観察する。毎夜十二時を過ぎても眠れず、鳩のように足音を忍ばせて巡回して歩く看護婦を逆に「彼」の方からじっと観察したり、病室の窓から南アルプスの季節の移り行きに画家のような視線を注いだり、あるいは叔母の別荘で古風な西洋の家具や茶器を置いて帰国したスコットランド夫婦の去年のことを回想したり……。ブルウスの小説構成の第二の特徴とした「薔薇窓式」の様式は十分に見てとれる作品です。

『美しい村』は「ワグネル式」の構成で、作者自身も「小遁走曲」の副題を付した散文詩的作品です。主人公の「私」は六月の初めにK：村へやって来る。まだほとんどの別荘は閉ざされていて、「私」が出会うのはK：村の自然と住民の生活だけ。数年前から夏ごとに來ていたこの村で、「私」は思い出に導かれるようにあちこちをさまよい歩く。K：村を背景にした牧歌的な小説の構想を練るためです。ところが、書簡体で書かれた「序曲」のなかで、

「あなた方とはじめて知り合ひになつたこの土地で、あなた方とも見知らない人同志のやうに顔を合せたりするのは、大へんつらいから、僕はあなた方のいらつしやる前に、この村を出發しようかと思ひます。」（「序曲」¹⁴）

この「あなた方」が『聖家族』に登場した細木夫人とその娘の絹子です。「序曲」につづく「美しい村」において、高原の初夏の気候のなかを、「私」は毎日のように散歩ばかりして、この村の何をいか

に書いたらいいか、考えあぐねる。山道の散歩で出会った人としては、細木夫人のヴィラの庭に羊歯を植えていた爺やをはじめ、部落の二人の子供、掘立小屋に住む気ちがいの家の娘、看護婦と二人だけで生活しているスイス人のレエノルツ医師。こういう変わった人たちに興味をもって、彼らの生活の過去を爺やに聞いたりするが、それも小説の主題にはなりそうでない。とある午後のこと、「私」の散歩の途次、チェコスロヴァキア公使館の別荘のなかから、ピアノの稽古の音が聞こえてくる。それはバツハのト短調の遁走曲らしい。「そのピアノの音のたゆたひがちな効果が、この頃の私の小説を考え悩んでゐる、そのうちにそれがどうやら少しづつ發展して來てゐるやうな氣もする、さう言つた私のもどかしい氣持さながらであつた」（『美しい村』¹⁵）。

「私」が「美しい村」のノートをとりながら、原稿を書いていたのは、つるや旅館の本館の一室においてですが、同旅館の別館の窓ぎわに、ある日忽然として「黄いろい麥藁帽子をかぶつた、脊の高い、瘦せぎすな、一人の少女」（矢野綾子¹⁶）が立っている。彼女は毎朝、絵具箱をぶらさげて、絵を描く場所を探している。「私たち」は短い会話を交わす間柄になり、「私」は彼女の前に手製の地図をひろげて、絵になりそうな場所を教える。溪流のほとりの樅の木の下に画架を据えて、パレットに絵具をなすりつけ出すのを見ると、「私」は彼女の仕事の邪魔をしないように、一人でその場をはなれる。

七月の半ばをすぎて、「私」は小説「美しい村」をようやく脱稿する。けれども、「私」はいま、こうしてつかみかけた幸福を振りすてて東京へもどることができなくなる。いっしょに散歩しながら、彼

女の肩に手をかけて心臓のはげしい鼓動を感じ、彼女はとうとうその腕を切なそうに「私」の腕のなかに委せる。彼女との関係はこうしていよいよ深まるけれども、冒頭の「序曲」にのべた不安の気持ちは終始拭えない。細木夫人と娘の絹子はすでに自分の別荘に来ている。何も知らない彼女といつしよに「暗い道」を歩きながら、細木夫人の別荘の窓枠のなかが洋灯の光を浴びているのを遠目に見て、「私」はますます心臓のしめつけられるような息苦しさを覚える。

『物語の女』は、堀辰雄の代表作『菜穂子』と『聖家族』の中間に位置する作品と見なされています。筆者がこれをあえてプルーストの影響下に入れたのは、三村夫人の心理解剖のしかたがいかにもプルースト的だからです。プルーストの小説の要点として堀辰雄の把握した魅力の「その一」⁽¹⁷⁾に相当する作品と考えるからです。

「私（三村夫人）」はこの日記をお前（菜穂子）⁽¹⁸⁾にいつか読んで貰ふために書いておかうと思ふ（『物語の女』⁽²⁰⁾）という書き出しで、未亡人の母から娘に残す日記の文体でこの小説ははじまる。夏のある日、O村の別荘に滞在していた三村夫人とその娘は軽井沢の知人のパーティに出席し、その席で小説家の森於菟彦に会う。そのときの森の印象について、「brilliantといふ字の化身のやうな」方と夫人は表現する。それから一週間ほどして、森が夫人をその別荘に訪ねて来る。折からの激しい夕立の後、二人が外に出てO村を散歩していると、村はずれに美しい虹がかかる。

「まあ綺麗な虹……」とひとりごちる夫人。森も夫人と並んでまぶしうにその虹を見上げたとき、心の触れ合いが生まれる。とこ

ろがそのとき、菜穂子が知人の明と車で乗りつけて、明に森の写真を撮らせる。数日後、菜穂子はK村のホテルに森を訪ねるが、すぐに引き返す。これを不審に思った森から夫人宛に手紙がとどいて、菜穂子の気持ちは解せないとのべ、さらにあの村はずれでいつしよに美しい虹を仰いだ後、「或る自叙傳風な小説のヒント」⁽²²⁾が得られたという。

その小説は「半生」という題名で雑誌に発表される。三村夫人はこれを読んで憂鬱なものを感じたのであるが、翌年の二月には森から手紙がきて、暮からずつと神経衰弱に悩まされていると書かれ、雑誌の切り抜きが同封されている。その切り抜きが自分に与えられた一連の恋愛詩であるのに気づき、ひよつとして娘もこれを読んでいるのではないかと、夫人は胸苦しい気分になる。

その夏、森がとつぜん夫人の別荘に現れる。森が驚くほど痩せて顔色の悪い様子を見て、夫人は胸のつまる思いに陥る。ところが、娘の菜穂子は驚くほど大人びた話しぶりで森の相手をする。そして森が辞去すると、菜穂子は前にもまして気むづかしい顔になり、母と口をきかい。

「お前は私のことを考へておいでなのだ。それからあの方のことも考へておいでなのだ。さうしてお前は私と同じやうな苦しみを苦しんでおいでなのにながひない。」（同右）⁽²³⁾

こうして三村夫人の心理をロマネスク風に分析し、解剖した作品です。

注

- (1) 「堀辰雄全集 第九卷」三十九〜四十ページ。
- (2) 同右 五十四ページ。
- (3) 「堀辰雄全集 第三卷」二十三〜四十ページ。
- (4) 同右 二十四ページ。
- (5) 「堀辰雄全集 第九卷」二百十八ページ。
- (6) 同右 二百八十一ページ。
- (7) 「堀辰雄全集 第三卷」八十六〜八十九ページ。
- (8) 同右 百三十一〜百四十三ページ。
- (9) 同右 百五十五〜百五十七ページ。
- (10) 同右 三十五ページ。
- (11) 「堀辰雄全集 第二卷」二百十七〜二百三十七ページ。
- (12) 「堀辰雄全集 第三卷」百七十四〜二百二十四ページ。
- (13) 「堀辰雄全集 第四卷」百二十三〜百四十二ページ。
- (14) 「堀辰雄全集 第三卷」百七十七ページ。
- (15) 同右 百九十六ページ。
- (16) 同右 二百四ページ。(一) 内は筆者注。
- (17) 本稿 一〇六ページ参照。
- (18) (一) 内は筆者注。
- (19) (一) 内は筆者注。
- (20) 「堀辰雄全集 第四卷」百二十三ページ。
- (21) 同右 百三十ページ。
- (22) 同右 百三十三ページ。
- (23) 同右 百四十二ページ。

矢野綾子とリルケへの傾倒

昭和九年、堀辰雄三十歳のときからの数年間が私生活においても、

堀 辰雄 管見 上野英雄

仕事においても多事多難の時期になります。まず私生活について見てみますと、『美しい村』に登場した「黄いろい麥藁帽子をかぶった、脊の高い、瘦せぎすな、一人の少女」⁽¹⁾つまり矢野綾子と知り会ったのは昭和八年夏の軽井沢においてでしたが、堀辰雄と彼女との恋愛関係はいよいよ進んで、翌年の夏に婚約します。この年の文学上の仕事としては、リルケの作品に親しみ、前年に創刊した季刊誌「四季」を月刊誌にして、その昭和十年六月号を「リルケ特輯」にするための準備に忙殺されます。その原稿の執筆をドイツ文学者の富士川英郎、大山定一、神保光太郎、片山敏彦らに依頼した手紙が残されています。

堀辰雄が矢野綾子宛に書いた絵はがき、はがき、封書は全部で十五通が「堀辰雄全集 第九卷」(書簡)⁽³⁾に収録されています。その内容は、大抵が近況報告ですが、そのなかでも「ピアンケといふ女の人⁽⁴⁾の書いたリルケ論を読んでゐる」(昭和十年三月十九日)⁽⁴⁾とリルケの仕事⁽⁵⁾を打ち明けたり、「淋しいから、お手紙を下さい」(昭和九年七月二十七日)⁽⁵⁾と甘えたりする。封書の呼称は「綾ちゃんに」と「綾子様」の二通りありますが、同時期の立原道造宛の封書では「僕の女房」⁽⁶⁾、葛巻義敏宛の封書では「僕の女房(なんていふのはまだ早い⁽⁷⁾)」とある。そして最後に矢野綾子の死亡する三日前、昭和十年十二月三日付の富士見高原療養所から神西清に宛てた封書を引用すると、

「今朝僕のフィアンセがひどい咯血をやつちやつた 閉口してゐる 御無心申してすまないが 何處かでゼリイの素を三個ほど買つて至急送つてくれないか 願ひする」⁽⁸⁾

堀辰雄が軽井沢で矢野綾子と知り合い、恋愛中に病床にいた彼女を彼女の父の家に見舞い、彼女といっしょにサナトリウムで療養生活をし、彼女の臨終の床に立ち合い、その一年後に思い出の軽井沢を訪ねて彼女に「鎮魂曲」を捧げる。この経緯にしたがって、新潮文庫の『風立ちぬ』⁹は編集されています。すなわち、「序曲」、「春」、「風立ちぬ」、「冬」、「死のかげの谷」の順序です。ところが、この五編の成立の順序は違います。成立の順序を証する資料として、当時の立原道造宛と室生犀星宛の手紙があります。

「……今日から小説やつと書き出したところ。いまのところ假りに〈婚約〉といふ題をつけている。二人のものが互にどれだけ幸福にさせ合へるか——、さういふ主題に正面からぶつかつて行くつもりだ。」（昭和十一年九月三十日、信濃追分油屋より、立原道造宛）¹⁰
この小説「婚約」が「風立ちぬ」と改題されます。さらに室生犀星宛の手紙では、

「……昨日より〈文藝春秋〉の奴にかかつてゐます 〈風立ちぬ〉の續篇のやうなものです、あの静けさを踏み抜いたやうな、はげしい息づかひのするものを書きたいと思つてゐます それからもう一つ〈鎮魂曲〉と云つたやうなものを書き、再び静かな〈風立ちぬ〉の主題に立ち返りたいと目論んでゐるのです」（昭和十一年十一月十二日、信濃追分油屋より）¹¹。

「風立ちぬ」の續篇のやうなものが「冬」と「春」と「死のかげの谷」でして、前二作はこの冬に完成しますが、「死のかげの谷」はとうとう書けず、リルケの『レクキエム』を熟読してから二年後に脱稿します。こういう事情から「死のかげの谷」は別に論じるこ

とにして、小説『風立ちぬ』の全体像を考えてみます。

「序曲」¹²

その夏のある日、「私達」（節子と私）は薄の生い茂った草原のなかで、節子の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、白樺の木陰に寝そべっていた。そのとき不意にどこからともなく風が立ち、その絵が画架とともにぱたりと倒れた。

「風立ちぬ、いざ生きめやも」¹³。

私はこの詩句を口ずさみながら、私に凭れている節子の肩に手をかけていた。それからやつと節子は私の手を振りほどいて、カンバスを画架に立てなおす。こんな幸福な夏の日々も、節子の父が彼女を迎えに来たときに終わる。私はひとりでホテルに閉じこもる。秋が林のなかを見ちがえるほど乱雑にしている。

「春」¹⁴

三月のある午後、私は婚約したばかりの節子を家に訪ねる。節子はこのときすでに胸を病み、寝間着の上に明るい色の羽織をひっかけて、長椅子に横になつてゐる。その姿に私は息詰まるほどセンシユアルな魅力を感じる。庭木の手入れをしていた節子の父が、節子に転地でもさせてみたらどうだろう、と私にいう。私は転地に賛成し、自分もいっしょに行つてあげたいと応じる。

「私がこんなに弱くつて、あなたに何だかお氣の毒で……」¹⁵

私たちは八ヶ岳山麓のサナトリウムへ行く準備をする。そして四月下旬のある朝、停車場まで父に見送られて、「あたかも蜜月の旅へでも出かけるやうに」¹⁶山岳地方へ向かう汽車に乗り込む。汽車がプ

ラットホームをはなれると、私たちは急に淋しくなったように、膝と膝をぴったりくっつけながら、心と心を温め合う。

「風立ちぬ」⁽¹⁷⁾

サナトリウムに着くと、私は病棟の二階の節子の病室のとなりの部屋に入れられる。こうして私たちの少し風変わりな愛の生活が始まった。というのも、ふつうの人がもう行き止まりだと信じているところから、私たちの生活は始まったからです。周囲の雑木林の初夏の景色を窓越しに眺めながら、「……あなたはいつか自然なんぞが本當に美しいと思へるのは死んで行かうとする者の眼にだけだと迎しやつたことがあるでせう。」と節子。この言葉に胸を突かれてもしたように、私は彼女の額にそつと接吻する。

院長は私に節子の写真の原板を見せて、思ったよりも重症だと説明する。季節は夏から秋へと移行行く。「お仕事をなさらなければいけないわ。」⁽¹⁸⁾という節子にたいして、私たちがこうして互いに与え合っている幸福、私たちだけのものを小説に書くのだ、と私が答える。しかし、どうしても良い結末が浮かんで来ない。病める女主人公が恋人の腕に抱かれながら、残される者の悲しみを悲しみ、自分は幸福そうに死んで行く影像。こんなことを夢想したことで、私は言いたいような恐怖と羞恥に襲われる。

「冬」⁽²⁰⁾（この章は日記体で節子の亡くなる前日まで綴られる）

「一つの主題が、終日、私の考へを離れない。」⁽²¹⁾（一九三五年十月二十七日）それは真の婚約の主題で、二人の人間がその余りにも短い一生の間にどれだけ幸福にさせ合えるか？運命の前に静かに頭をうなだれて、互いに心と心、身と身を温め合いながら、並んで立つ

ている男女の姿。そんな私たちの姿を描いて、いまの私には何も描けない。

「私はもう二三日すれば私のノオトを書き了へられるだらう。」⁽²²⁾

（同年十一月十七日）そのために何か結末を与えなければならぬが、今こうして生きつづけている私たちの生活に結末を与えたくない。むしろ、私たちの現在のあるがままの姿でノオトを終わらせるのが、いちばん好い。

「高いほど金額、もう静かな光さへ見せてゐる目、引きしまった口もと、——何一ついつもと少しも變つてゐず、いつもよりかものもつと犯し難い」⁽²³⁾（同年十二月五日）ように、節子の寝顔が私には思えた。

「日記はこの日で終わり、翌六日に節子は死去する。」

以上が「死のかげの谷」を除外して、筆者なりにまとめた『風立ちぬ』の梗概です。さらに筆者は節子（実名 綾子）の遺言らしいものがないかと、堀辰雄の『書簡』に当たってみました。その結果、昭和十三年二月四日付、加藤多恵子宛の封書のなかに、堀辰雄が面接話法でのべた綾子の遺言を発見しましたので、それを引用してみます。

「綾子は死んでゆく前に、僕のゐる前でね、お父さんに僕にいい人を持たせて上げて下さいと言ひ残していつたのです。それがもう最後の言葉になりはしないかと思ふほど、死を前にして苦しんでゐましたが、それから突然へお父さんも本當にいい人だつたし、辰ちゃん（綾子もいつのまにか僕の事をさう呼んでゐました。）も本當

に好い人だつたし、私、本當に幸福だつた」となんだかそんな苦しみの中から一所懸命になつて言つて、それからそのまま最後の死苦のなかに入つていきました。⁽²⁴⁾

ところで、昭和九年からリルケに親しみはじめた堀辰雄は、「四季」の昭和十年六月号を「リルケ特輯」として編集するために、リルケの『マルテの手記』、『新詩集』、『ドウィノの悲歌』を耽読し、『或る女友達への手紙』、『リルケ書簡(ロダン宛)』、『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』を翻訳し、さらに『リルケ』年譜⁽²⁵⁾まで作成しています。そして「或る女友達」にリルケが捧げた『鎮魂曲(レクキエム)』を幾度も読み返し、解釈し、翻訳した事実。綾子の死後、この『レクキエム』に深く感動した堀辰雄は、昭和十二年四月四日付、富士川英郎宛の手紙のなかで、目から鱗の落ちた思いを告白して、

「去年(昭和十一年)の夏『レクキエム』を読み、詩とはかういふものだつたのかとはじめて目がさめたやうな気のした経験があり、そんな気もちをもつとはつきり深くさせたいやうなくぶん性急な思ひにかられてゐるのも事実なのです」(『書簡』⁽²⁶⁾)。

この「いくぶん性急な思ひにかられて」、堀辰雄は「死のかげの谷」に着手するのですが、その前提として私たちはリルケの『レクキエム』とこれを解説した堀辰雄の『鎮魂曲』⁽²⁷⁾を見ておかなければなりません。

そもそも「レクキエム」Requiemの語源はラテン語で、カトリッ

ク教会の用語であり、「死者のためのミサ——死者のために煉獄の苦痛を軽減せんとするミサ——を意味し、Requiem aeternam dona eis(永遠の安らぎをかれらに与えよ)」という祈りの言葉⁽²⁸⁾に由来しています。それでは、リルケはだれのために「レクキエム」を捧げたのか。『或る女友達のため』に。その「女友達」とはだれなのか。

ここでリルケの生涯を瞥見してみると、一九〇〇年、彼がヴォルプスヴェエデの芸術家村で暮らしている間に、女流彫刻家クララ・ヴェストホフとブロンドの閨秀画家パウラ・ベッカーの二女性と知り合いになります。そして同年秋、パウラ・ベッカーはオットー・モーダーゾーンという画家と婚約し、クララ・ヴェストホフは翌年の四月にリルケと結婚します。⁽²⁹⁾結婚してパウラ・モーダーゾーン・ベッカーとなつた閨秀画家は、一九〇二年には早くも生活と仕事の間の反目に悩み、「私の経験では、結婚は幸福をましてはくれない。」(同年三月三十一日の日記)⁽³⁰⁾と書き、一九〇七年には女兒を出産したけれども、産褥熱が原因で夭折する。⁽³¹⁾一方のリルケは女流彫刻家との間に一人娘が生まれたのに、一九〇二年には家庭生活を解散し、単身でパリに赴く。パウラ・ベッカーとリルケのこつこつと経歴と『或る女友達のための鎮魂曲』⁽³²⁾の内容からして、「或る女友達」とは明らかにパウラ・ベッカーを指しています。

次に堀辰雄がこの『鎮魂曲』をどう讀んだか、という問題に移ります。詩人リルケの微妙な筆は、この二百七十一行の長詩の冒頭、夭折した女友達が生者のところに帰ってきて、何か忘れていったものを探し求めるかのように、おずおずとさまよい歩いている姿を描いている。彼女の探し求めているものは何なのか？

「言ひなさい……」

お前は何處かに、或物を残してきたのだが、

それがお前のところに來ようとして苦しんででも

ゐるといふのか？」⁽³³⁾

「そして遂にお前はお前自身を果實として見るやうになり、

お前自身をお前の着物から引き出して、鏡の前に運び、

それをお前の見るがままに委ねて置いたものだった、

するともはやそれは「あれは私だ」とは言はずに、

「これが私だ」と言ふのだった」⁽³⁴⁾

彼女は死によつて中絶された仕事を仕上げたがつてゐるのではないのか。彼女が自分のなかの強くて自由な魂を成熟させようと努力してゐたとき、とつぜん外部から別の労役——「母になること」

——が現れたのだ。彼女を母とならせて死なせたのは、彼女を所有して彼女を意のままにできると思つてゐた彼女の夫だろうか。それはむしろ、彼のなかの男である。しかし、自分自身さえ保つておられない男が、どうして愛人を所有などできようか。

こういう慟哭的で嚴肅な調子が、『レク牛エム』の詩全体に流れてゐる。そしてこの天折した純潔な犠牲者の例から、人生と偉大な仕事との間にはいかに大きな敵意があるか、という永遠の法則が抽き出される。その高調した詩の最後をリルケは次の言葉で結ぶ。

「歸つていらつしやるな。もしお前に我慢ができたなら、

死者と俱に死んでいらつしやい。死者にはたとと仕事がある。

が、私に助力して下さい、それがお前の気を散らさない範圍で、遠方のものが屢々私に助力してくれるやうに、私の裡で」⁽³⁵⁾

堀 辰雄 管見 上野英雄

堀辰雄がリルケの長詩『或る女友達のための鎮魂曲』⁽³⁶⁾を幾度も読み返し、解釈し、部分訳もして、昭和十一年「文藝懇話會」十二月號に發表した『鎮魂曲』⁽³⁷⁾。その要旨についてのべたところですが、堀辰雄の小説『風立ちぬ』の終章『死のかげの谷』も書けないままにしていたものが、この『鎮魂曲』に影響されて、翌年(昭和十二年)十二月末日ついに脱稿します。ただし、この年の十一月十九日、堀辰雄の滞在していた軽井沢の油屋旅館が全焼し、それがたまたま川端康成の別荘へ行つてゐる間の出来事だったので、堀辰雄は何ひとつ持ち出せませんでした。あるいは、この火事のためにこの冬を軽井沢の山小屋(川端康成から借りた別荘)で過ごしたことが、『死のかげの谷』の完成に幸いしたかもしれません。この辺について、昭和十二年十二月三十一日付、加藤多惠宛の手紙に次のように書いています。

「仕事の方は豫定どほり片づけました。『風立ちぬ』がやつと二年ぶりで完成したわけです。今度のはあの小説のおしまひに附けたいと思つてゐた死者に手向ける Requiem のやうなものです——本當は去年の冬、それを書きたいばかりにこちらで冬を一人で送つた位でしたがとうとうそれが書けず——さういふものは自分には永久に書けないのではないかと思つて半ば諦めてゐたのが、今度の火事のおかげで、いまのやうな山小屋住ひをよぎなくされて居るうちに急に書きたくなつて……一気に書いてしまひました 本當にいろいろなものをば火事で失つたけれど、その代りにこの一篇が書けたので、もう焼けた何もかもさへ、さう惜しくはない位、——來年の三月頃、

『風立ちぬ』を一まとめにして好い本にしたいと思つてゐます。今度の奴は「死のかげの谷」といふ題、……」（『書簡』³⁸）
 こういう事情を踏まえて筆者もふたたび『風立ちぬ』の終章にもどります。

「死のかげの谷」³⁹（終章も日記体で一九三六年十二月中の日付）
 私が小さな山小屋を借りてこの冬を過ごすためにK：村に着いたとき、この村はもうすっかり雪に埋まつていた。私の借りた小屋の近くに別荘をもつ外人たちは、この谷を「幸福の谷」とよんでいる。そうだけれども、こんな人けの絶えて雪に埋もれた谷のどこが「幸福の谷」なのだろう。それとは反対に「死のかげの谷」といった方が私にはよほど似合いそうだ。小屋に着いた私は、一年半ぶりにこの手帳を開いた。

北方の山がしきりに吹雪いている。それが去年のいま頃、私たちのいた山のサナトリウムの追憶を蘇らせる。今夜のように雪の舞っている夜ふけのこと、私は電報で呼びよせたお前の父の来るのを待っていた。真夜中近くにやっと到着した父は、お前の憔悴しきった顔をじつと見守っていた。そのうちに突然お前は小さな声で私に向かつて、「あなたの髪に雪がついてゐるの……」⁴⁰。外からもどったいま、ふいと蘇ったお前の言葉に誘われるように、私は自分の手を頭髮に触れてみる。と、それはまだ濡れるともなく濡れていて冷たい。

「昔、お前とよく繪を描きにいった、真ん中に一本の白樺のくつきりと立つた原へも行つて見て、まだその根もとだけ雪の残つてゐる

白樺の木に懐しさうに手をかけながら、その指先が凍えさうになるまで、立つてゐた。」（十二月十三日）⁴¹ 　しかし、私にはまだその頃のお前の姿がほとんど蘇って来ない。

お前を静かに死なせておこうとはせず、お前を求めて止まなかつた自分の心に後悔に似たものをはげしく感じたのは、私が暖炉の傍で雪の谷を見やりながら、リルケの『レク牛エム』を読み始めたときのこと。

「私は死者達を持つてゐる、そして彼等を立ち去るが儘にさせてあげるが、……只お前——お前だけは歸つて来た。お前は私を掠め、まはりをさ迷ひ、何物かに衝き當る、……」（十二月十七日）⁴²

その翌日、ようやく雪がやんだので、私は裏の林を奥へ奥へと入つて行つた。その散歩の帰途、自分の背後に自分のではないもう一つの足音がする。私はそれを振り向きもしないで、『レク牛エム』の最後の数行が口を衝いて出るがままにしていた。

「歸つて入らつしやるな。さうしてもしお前に我慢できたら、死者達の間に死んでお出。死者にもたんと仕事はある。……」（十二月十八日）⁴³

この狭い谷のなかで明かりのついているのは、たった一軒、私の小屋だけらしい。この谷を人々と同じく「幸福の谷」とよんでもよい。ただし、この谷の向こう側があんなに風がざわめいているのに、谷のこちら側はこんなに静かなのです。

注

（一）「堀辰雄全集 第三卷」二百四ページ。

- (2) 「堀辰雄全集 第九卷」七十四ページ以下。
- (3) 同右 六十六〜七十六ページ。
- (4) 同右 七十五ページ。
- (5) 同右 六十七ページ。
- (6) 同右 七十八ページ。
- (7) 同右 七十九ページ。
- (8) 同右 八十ページ。
- (9) 新潮文庫「風立ちぬ・美しい村」(堀辰雄著) 七十五〜百六十九ページ。
- (10) 「堀辰雄全集 第九卷」八十二ページ。
- (11) 同右 八十四ページ。
- (12) 「堀辰雄全集 第五卷」七十一ページ。
- (13) 同右 七ページ。
- (14) 同右 六十三〜七十二ページ。
- (15) 同右 六十九ページ。
- (16) 同右 七十二ページ。
- (17) 同右 十一〜三十六ページ。
- (18) 同右 十九ページ。
- (19) 同右 三十一ページ。
- (20) 同右 三十七〜五十二ページ。
- (21) 同右 三十九ページ。
- (22) 同右 四十三ページ。
- (23) 同右 五十二ページ。
- (24) 「堀辰雄全集 第九卷」百二十三〜百二十四ページ。
- (25) 同右 九十一ページ。
- (26) 富士川英郎ほか訳「リルケ全集 全十四巻」(弥生書房) 中の「第二巻」二百六十五〜二百八十一ページ。
- (27) 「堀辰雄全集 第四巻」二百五十七〜二百六十一ページ。

堀辰雄 管見 上野英雄

- (28) 玉蟲左知夫訳・注・年譜「リルケ作『ある女友だちのための鎮魂歌』」(朝日出版社刊「東洋の詩 西洋の詩」五百八十三〜六百十六ページ所収) 五百九十四ページ。
- (29) 同右 六百十ページ。
- (30) 同右 六百十一ページ。
- (31) 同右 六百十六ページ。
- (32) 注(26)と同所。
- (33) 「堀辰雄全集 第四巻」二百五十九ページ。
- (34) 同右 二百五十九〜二百六十ページ。
- (35) 同右 二百六十一〜二百六十一ページ。
- (36) 注(26)と同所。
- (37) 注(27)と同所。
- (38) 「堀辰雄全集 第九巻」百十七〜百十八ページ。
- (39) 「堀辰雄全集 第五巻」百六十二〜百七十五ページ。
- (40) 同右 百六十五ページ。
- (41) 同右 百六十九ページ。
- (42) 同右 百七十一ページ。
- (43) 同右 百七十二ページ。

リルケへの愛着と研究

一九三六年四月六日の堀辰雄の日記に、
 「昨日も今日も、午後だけ私は仕事部屋に行って、ビアンキイの『リルケ論』中の『レキエム』に関する頁を読んだ。私はそれを書き抜いた。リルケとともに、そして、リルケを通して思索することとは、(特に「死」について)私には言葉に云へぬほど氣持がいい。」

堀辰雄の Rilke への愛着と研究は、三十歳のときから晩年までつづきます。彼が Rilke のどの作品に愛着し、Rilke のどういう所に心を惹かれていたか。この問題を解く手掛りとして、私たちは堀辰雄が残した左記のジャンルの文献に当たることが出来ます。

- (一) 堀辰雄の「Rilke・ノオト」。
- (二) Rilke の作品の翻訳と年譜の作成。
- (三) Rilke に関するエッセイ。
- (四) 師友知人あての書簡。
- (五) 三十歳以後の文学作品。

ただし、(五)については、堀辰雄が当時すでに着手していた日本の王朝文学の研究と Rilke の影響が渾然と混濁された作品なので、これについては章を改めてのべることにし、(一)―(四)を以下に順次、見て行きます。

(一) 堀辰雄の「Rilke・ノオト」

これは「Rilke に関して堀辰雄がさまざまな雑記帳や、手元にたまたまあった用箋・紙片に書きしるしたノオト」⁽²⁾として、「堀辰雄全集」第四巻と第五巻に収録されています。まず第四巻所収のものを列挙し、その概略をのべてみます。

☆ RILKE NEUE GEDICHTE ⁽³⁾

Rilke の『新詩集』⁽⁴⁾は二部から成り、その第一部には七十三篇、第二部には百二篇の詩が収められている。そのなかで、堀辰雄の印

象に残った詩四十一篇を抽出して、それぞれの詩についての印象をメモしたノオト。その一例として、Das Roseninnere (薔薇の内部) を引用してみると、

「彼(Rilke)は薔薇の花辨(神々しい傷のために用意せられた薄い紗、みしらない空が映つてゐる純粹な湖)の間に光つてゐる形容しがたい色彩や、又、その半ば咲きかかり、そしてその既にほころびたいくつかの花片が壺から溢れて一日中、一夏中、を好い匂でいつばいにさせる、その花の塊り工合を、彷彿せしめんとする」⁽⁵⁾。

☆ RILKE (Malte) ⁽⁶⁾

『マルテの手記』の梗概をメモの文体で要約してから、その主題は(I)現実 (II)死 (III)貧困 (IV)愛にあるとする。けれども、(IV)については何も記していない。

(I) 現実

マルテ(Rilke)がもし、フランシス・ジャムのように田舎の家で一人で生活していたならば、彼はおそらく神の存在を守っていただろう。しかし、彼はパリの大都会の渦中に置かれて、地上の生活の荒ら荒らしさを見だし、これに対して必要な順応を求めなければならぬ破目になる。マルテは限りなく感じやすく、神経質で憔悴した男です。彼は逃げるということを考えたかもしれない。しかし、彼は「この内生活のなかの大都会を積分するために」パリに來たのであって、神の方へ飛躍するためでもなく、天使と格闘するために來たのではない。だから、ただ現実と格闘して苦しむのみのだ。

(II) 死

リルケはパリの街に死と病氣と苦痛と悲慘だけを認める。一九〇三年、リルケはパリの人びとの不幸を『貧困と死との書』⁽⁷⁾に表現しているが、一九一〇年に上梓された『マルテの手記』⁽⁸⁾には前者のような苦痛の叫びはなく、また *Eleger* (一九二三年) のように快活な讃歌でもない。『手記』はいわば『探究と思索の書』である。リルケは死の前にたえず自分を置いて、多くの死者をよび出す。とりわけ、マルテの近親である侍従官ブリッケが館のなかで、個性のある死を死んでいく姿の描写が圧巻である。

(III) 貧困

リルケはパリの貧しい人たちの仲間から自分を区別させようと努力する。彼はどこへ行っても、わが家にいるような気持ちになれない。自分の国や家族や神や愛から離れた、『流離の人』です。そんな適応性のない青年が、大都會の渦中で病氣と貧乏に飲み込まれそうになっている。そういう状況で自分の存在の可能性を求めなければならぬ。そしてただ国立図書館のなかだけで、彼はわが家にいるような気持ちをもつ。貧困の偉大さについても、いずれは知ることになるだろう。

☆ RILKE I ⁽¹⁰⁾

神について。

一、「修道院生活」

リルケの尼は神との融合を願わず、また、原罪の観念も聖寵の観念もない。

堀 辰雄 管見 上野英雄

二、「巡礼之巻」

「マルテの手記」における神の位置に近づく。教会のなかには、もう神はいない。神を噴水のように考える。

三、「貧困と死の書」

われわれが神を建てる。それは人間に必要な仕事だ、とリルケはいう。彼をカトリシズムにひきつけようとしても無駄である。彼はキリストも三位一体も原罪も信じていない。

☆ RILKE II ⁽¹¹⁾

彷徨。

ブラークを逃走したリルケはドイツに滞在し、ロシアにも旅行し、スカンジナビアにも抑留するが、彼をそこに定住させない。北方より南方のイタリヤへ、あるいは東方より西方へと彼を移動させた動揺は一時止む。それはパリにおいてであるが、この地でロダンが彼に製作の技法を教え、パリは彼に生の技法を与える。けれども、「マルテの手記」の完成をもって、パリの経験も卒業する。

死。

「死、一皿のない茶碗 (Tasse ohne Untersatz) の中に残つてある青味を帯びた汁、——が其處に在る」⁽¹²⁾に始まる。これはリルケの『後期の詩』のなかの „Der Tod“ と⁽¹³⁾いう詩全体を堀辰雄が試訳したもの。「リルケ全集 第五巻」の訳注によると、原詩は、死を恐れてこれを直視しない人間と、そういう人間に異物のようにとつぜん襲いかかる死を歌ったものである。

堀 辰雄 管見 上野英雄

一一八

☆ RILKE III ⁽¹⁴⁾

日時計の天使（シャルトル）

「嵐の中で——強い Kathedrale のまはりに

（思索に思索をつづけてゐる）一人の否定者のやう

に怒號する、——

人はおんみの微笑のしるしを見るとおもはずいとは

しくなつておんみの方へひかれるのを感じる」（第一聯⁽¹⁵⁾）

この第一聯から第四聯まで。リルケの『新詩集』に収録されている同名の詩全体を堀辰雄が試訳したもの。

☆ RILKE IV ⁽¹⁶⁾

Briefe aus Muzot : (1921—1926)

リルケは一九二一年以後、ミュンヘンの館において、『ドゥイノの悲歌』と『オルフォイスへのソネット』⁽¹⁷⁾を仕上げただけでなく、ヴァレリーの『詩集』も翻訳し、また、孤独感が彼に多数の手紙を書かせた。その手紙の宛て先を子細にメモしたもので、そのなかには左記のような著名人あての手紙が含まれている。

Fürstin Taxis

Lou Andreas—Salomé

Rudolf Kassner

Hans Carossa

Hugo von Hofmannsthal

☆ 「ドゥイノ悲歌」⁽¹⁹⁾

「第三悲歌」解説

恋において女は神の方へ上昇するけれども、男は大地と人生の暗い餌食になる。なぜなら、男のうちには太古からの血の流れ、欲望、「生液」が支配しているから。愛される女性はどういう男性にどう応じたらいいのか。暗黒の交わりに入ることなく、やさしい心遣いと日常の仕事で男性の目の前に見せてやるがいい。

「第四悲歌」

「おお、生命の樹々よ、おんみの冬はいつ？」に始まる悲歌において、小鳥や獅子や樹木はすべて季節の推移に順応し、自然の法則のままに本能的に生きている。しかし人間だけはちがう。人間は生のうちにあって死を意識し、開花のうちにあって凋落を思い、恋人同志は恋のうちにあって恋の限界に行きあたる。こういう解説の後で、最も難解とされる「第四悲歌」全体の試訳を堀辰雄がする。

以上が「堀辰雄全集」第四巻に収録された「リルケ・ノオト」の概略です。つづいて、筆者は「堀辰雄全集」第五巻所収のものを列挙し、その概略をのべてみます。

☆ ROBERT PITROU : RILKE ⁽²⁰⁾

一八七五年、リルケがプラアグに生まれてから、一九二六年、ヴァルモンにて死ぬまでの経歴、著作、外遊、交友について表題の本からメモ風に記述したもの。ここにはリルケの差し出した手紙や作品名まで年（月日）をそえて記入されている。したがって、この

ノオトの執筆年代は未詳とされているけれども、堀辰雄が昭和十年、「四季」六月號（リルケ研究號）に発表した「リルケ」年譜⁽²¹⁾はこのノートを基本にして作成されたものと、筆者は推定します。

☆Kaubisch : „Rainer Maria Rilke.

Mystik und Kunstertum”⁽²²⁾

「神のない世紀の中で、自己のため及び我々すべてのために、神のimageを救ふ」と。—その使命に、その天職に、彼（リルケ）はその人格とこの全生涯を犠牲にした」という表題の本の序文を引用してから、聖母マリアの生涯と昇天について記述し、さらにリルケの「形象詩集」、「時禱詩集」、「ドゥイノ悲歌」におけるマリアとの類似についてメモしたもの。

☆Souvenirs de Rilke I⁽²³⁾

表題の書名はFürstin Taxisの著「リルケの思い出」のフランス語版„Souvenirs sur Rilke, 1936.”。したがって、このノオトのなかの「私」はタクシス夫人、「私たち」はリルケとタクシス夫人と解してよい。一九一〇年、「マルテの手記」完成後のリルケは健康衰え、憔悴した状態にあつたので、タクシス夫人は、アフリカ旅行から帰国したリルケに自分の所有する「ドゥイノの館」を提供して、リルケを激励する。リルケはここで「ドゥイノの悲歌」と「オルフォイスへのソネット」の執筆に着手し、アルコフォラード「ぼるとがる文（ふみ）」の翻訳もする。

☆Souvenirs de Rilke II⁽²⁴⁾

一九一三年、リルケはパリに帰り、一九二二年にはついに「悲歌」の完成したことをタクシス夫人に伝える。ここには一九二六年のリルケの訃報に接するまでのタクシス夫人の思い出の抜粋がメモされている。堀辰雄のした抜粋のなかで、とくに筆者の注目するのは、『後期の詩』のなかの（Der Tod）の成立事情について子細に記述された所です。

☆「最初の二つの悲歌」・「ELEGIES」の名稱・

△「ドゥイノ哀歌」の構成⁽²⁶⁾

（悲歌）と（ソネット）はいつも互いに支え合っている。（ソネット）の錆び色の小さな帆と（悲歌）の真っ白の大きな帆。この二つの帆が一つの息でふくらまされている。

（Elegies）という語が（Requiem）という語に応じるように見えるとしても、前者は後者のように死をして全編を支配させない。（Elegies）は死から湧きおこり、死をついに征服する讃歌である。（哀歌）には熟考された構成のようなものは見られない。これは心臓の所産だからである。リルケは心臓でもって思索する。彼は「哀歌」を推論によってではなく、詩人の幻覚、いわば電光によって仕上げたのである。

☆「ドゥイノ悲歌」⁽²⁷⁾

神の啓示がリルケに三つの使命を与え、「ドゥイノ悲歌」においてリルケはその使命に応じたとする。その三つの使命とは、「愛」を

歌うこと。「事物」について語ること。「死」を著名にすること。このノオト中の(第一悲歌)はリルケのそのの解釈と試訳。(第二悲歌)は試訳と解釈。(第三悲歌)は試訳。(第七の悲歌)は解釈。(第九の悲歌)は各聯の要旨のノオト。

☆R. M. R. (ELEGIES) — Pickman — (1) ⁽²⁸⁾

英国の雑誌に発表された表題の論文を翻訳したのですが、囲みのなかの文はリルケの原文からの翻訳。

他人の愛はリルケにとっては、彼の逃れようとした束縛にすぎない。「悲歌」においては、リルケはもはや探求者でない。羊歯が春になるとほどこけて、その錯雑した葉がすっかり私たちの前に広げられ、何ひとつ所を得ないものがないように、リルケの思想は羊歯の姿で展開される。人間の唯一の堅固なものは幼ころ、唯一の確実なものは死、唯一の本質的なものは悲しみである、という思想を根幹として「悲歌」は展開される。

☆Elegies 解説 — Pickman — (2) ⁽²⁹⁾

「悲歌」を読む初心者のための手引きになるように、十篇の「悲歌」について要約したもの。ただし、囲みのなかの文はリルケの原文からの翻訳。

このノオトのなかで筆者の注意を惹いたのは、(第八悲歌)のなかの蝙蝠の飛翔の描写がそのまま、堀辰雄のエッセイ「山日記」その⁽³⁰⁾に引用された部分である。また、サロメ夫人がリルケの絶筆について語ったところによると、リルケは青鉛筆でもって世話になっ

た人々に謝意を記してから、その一番下に書きそえた一行。それは「aber die Hölle」(あれぞ恐ろし)⁽³¹⁾だったとのこと。

☆RIKKE MISCELLANEA ⁽³²⁾

一九二二年に着手して一九二二年に完成するまでの「悲歌」の各編がいつ、どこで書かれ、書きつがれたか、ということについての雑録。一九二二年二月十一日夕六時に擱筆したリルケは、ただちにそのことをFürstin Turn und Taxis-Hohenlohe および Lou Andreas-Salomé に手紙で知らせ、その翌日にはElegien全部の写しに手紙をそえて Wunderly-Volkart 夫人に送っている。

☆「家常茶飯」の作者 ライネル・マリア・リルケ ⁽³³⁾

明治四十二年、森鷗外が雑誌「スバル」にリルケを紹介する文章を発表し、翌年にはリルケの戯曲「Das tägliche Leben」を「家常茶飯」という題名で翻訳して、雑誌「太陽」に発表した。

富士川英郎氏によると、「いずれもこれが我が国に於ける最初のリルケの翻訳であり、また、紹介文⁽³⁴⁾である。その紹介文の一部を堀辰雄が書き取ったのが、このノオトです。ここには、たとえばリルケの旅行した国々についての記述に間違いもありますが、これは森鷗外の間違いをそのまま書き写したためと考えられます。

注

- (1) 「堀辰雄全集 第四巻」二百八十八ページ。
(2) 「堀辰雄全集 第十巻」二百八十一ページ。

- (3) 「堀辰雄全集 第四卷」二百九十八〜三百八八ページ。なお、堀辰雄の使用した原典については、「堀辰雄全集 第十卷」(堀辰雄案内)二百八十一〜二百八十四ページにおいて、田口義弘氏が「リルケ・ノオト」のすべてについて個々の原典を教示しておられる。
- (4) 富士川英郎はか訳「リルケ全集 全十四卷」(弥生書房)(以下、「リルケ全集 第 卷」と略記する)。「リルケ全集 第三卷」に、高安国世氏による『新詩集』の全訳・訳注・解説が収録されている。
- (5) 「堀辰雄全集 第四卷」三百ページ。
- (6) 「堀辰雄全集 第四卷」三百九〜三百十六ページ。
- (7) 一九〇三年、リルケ二十八歳のときの詩編『時禱集』のなかの二編で、「リルケ全集 第二卷」に、尾崎喜八氏による『貧困と死の書』の全訳が収録されている。
- (8) リルケ三十五歳のときに刊行された小説。「リルケ全集 第七卷」に、大山定一氏による『マルテの手記』の全訳・訳注・解説が収録されている。
- (9) リルケ四十八歳のときに完成した畢生の詩集「リルケ全集 第四卷」に、富士川英郎氏による『ドウイノの悲歌』の全訳と詳細な註解が収録されている。
- (10) 「堀辰雄全集 第四卷」三百十七〜三百二十一ページ。
- (11) 「堀辰雄全集 第四卷」三百二十一〜三百二十三ページ。
- (12) 同右 三百二十二ページ。
- (13) 「リルケ全集 第五卷」七十七ページの富士川英郎氏による訳注。
- (14) 「堀辰雄全集 第四卷」三百二十三〜三百二十四ページ。
- (15) 同右 三百二十三ページ。
- (16) 「堀辰雄全集 第四卷」三百二十四〜三百二十七ページ。
- (17) 注(9)に同じ。
- (18) 一九二三年、リルケ四十八歳のとき、『ドウイノの悲歌』とあわせて完成した詩集「リルケ全集 第十三卷」に、富士川英郎氏による『オルフォ

堀 辰 雄 管 見 上 野 英 雄

- イスへのソネット」の全訳と詳細な註解が収録されている。
- (19) 「堀辰雄全集 第四卷」三百二十八〜三百三十五ページ。
- (20) 「堀辰雄全集 第五卷」二百二十一〜二百二十九ページ。
- (21) 「堀辰雄全集 第四卷」二百二十一〜二百二十ページ。
- (22) 「堀辰雄全集 第五卷」二百十九〜二百二十四ページ。
- (23) 「堀辰雄全集 第五卷」二百二十四〜二百三十五ページ。
- (24) 「堀辰雄全集 第五卷」二百三十五〜二百四十一ページ。
- (25) 同右 二百三十七ページ。
- (26) 「堀辰雄全集 第五卷」二百四十一〜二百五十三ページ。
- (27) 「堀辰雄全集 第五卷」二百五十三〜二百六十八ページ。
- (28) 「堀辰雄全集 第五卷」二百六十八〜二百七十四ページ。
- (29) 「堀辰雄全集 第五卷」二百七十四〜二百九十七ページ。
- (30) 「堀辰雄全集 第六卷」七十六ページ。
- (31) 「堀辰雄全集 第五卷」二百九十七ページ。
- (32) 「堀辰雄全集 第五卷」二百九十八〜二百九十九ページ。
- (33) 「堀辰雄全集 第五卷」三百〜三百二ページ。
- (34) 富士川英郎「日本に於けるリルケ」(朝日出版社刊「比較文学研究」第一號〜第十號中の第四號)五十九ページ。

(二) リルケの作品の翻訳と年譜の作成

(一)の「リルケ・ノオト」のなかにも、たとえば、「日時計の天使(シャルトル)」⁽¹⁾のような翻訳があります。しかし、こういう翻訳はあくまでも試訳としてノオトされたものでして、「リルケ・ノオト」のすべてが、堀辰雄の生前には活字にしなかったものばかりです。それでは、堀辰雄が生前に諸雑誌に発表したリルケ関係の作品

の翻訳にはどういふものがあるのか。また、堀辰雄の作成・発表した「リルケ」年譜⁽²⁾はどのような内容と性質のものだったのか。以下において、発表年月順にこれを見に行きます。

☆「マルテの手記」

一九三四年(昭和九年)「四季」十月号、十二月号および一九三五年(昭和十年)「四季」一月号。「堀辰雄全集 第四卷」一五〇ページ〜一六三ページ。

「マルテの手記」は二部から成り立っていますが、その第一部の最初の部分だけの翻訳。けれども、この翻訳のなかに、「死ぬ」という行為についてのリルケのユニークな考え方が描写されている。リルケは侍従官クリストフ・デトレフ・ブリッゲの死は七週間もウルスゴーに滞在したとして、こんにちの医学とは逆に、心臓の停止の後に脳死が来るといふ態度で、この時間帯を七週間に拡大して描写する。

「マルテの手記」の全訳は「リルケ全集 第七卷」に大山定一訳がある。原典は、*Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*。⁽²⁾

☆「窓」

一九三四年(昭和九年)「文芸」十二月号。「堀辰雄全集 第七卷」一一三ページ〜一二七ページ。

リルケがフランス語でさりげなく書いた詩で、リルケの没後、一九二七年に上梓される。フランス語の原題は、*Les Fenêtres*。⁽³⁾

詩集「窓」の全編I-Xを堀辰雄は全訳したのみならず、解説も加えているが、解説については後述する。なお、「リルケ全集 第五卷」にも同じ原詩からの矢内原伊作訳がある。

☆「巴里の手紙」

一九三五年(昭和十年)「四季」二月号、三月号。「堀辰雄全集 第四卷」一八三ページ〜一九六ページ。

一 ルウ・アンドレアス・サロメに

一九〇三年七月十六日、

フレエメン郊外ヴォルプスウェデにて⁽⁴⁾

二 妻クララに

一九〇二年九月十一日、

巴里トウリエ街十一番地⁽⁵⁾

三 オオギュスト ロダンに

一九〇二年九月十一日、

巴里トウリエ街十一番地⁽⁶⁾

右記の三通の手紙の翻訳。堀辰雄の指摘したとおり、この手紙のなかに精妙に描かれたパリのいくつかの情景が、後日「マルテの手記」のなかに殆どそっくりそのまま用いられている。

☆「時計の天使」

一九三五年(昭和十年)「文芸」四月号。「堀辰雄全集 第四卷」一九七ページ〜二〇一ページ。

一九〇六年一月二十五日、リルケはロダン夫妻に同行して、シャ

アトルの本寺（カテドラル）を見物に行った。そのときの状況について、同日中に妻クララに出した手紙とその翌日に妻クララに出した手紙⁽⁸⁾、この二通の翻訳と解説。堀辰雄にとって特に重要なのは後者であり、この手紙のなかに、両芸術家の離反への前兆を暗示するものを見ている。

「それ（大きなカテドラル）はいつも、自分の偉大さに悩まされてゐる、騒がしい、悪い風に取り巻かれてゐるのだ」とロダンがリルケにいったとき、他方のリルケは「自分の仕事をするためには、一人きりにならなければならぬ」という焦燥に襲われていた時期である。こういう情景を冒頭において、「その後の二人の気持が漸次離反して行く悲劇的な経過を、短編小説にしてちよつと書いてみたい⁽¹¹⁾」という誘惑を堀辰雄は感じる。

☆「或女友達への手紙」

一九三五年（昭和十年）「四季」六月号（リルケ研究号）。「堀辰雄全集 第四卷」二〇六ページ―二二一ページ。

この手紙はリルケの没後、「新フランス評論」一九二七年二月号に発表されたのですが、「或女友達」は若い閨秀画家パウラ・ベッカーのことが、詩集「窓」の挿絵を描いた *Baladine* を指しているのか、判然としない。堀辰雄はこの手紙を翻訳したほか、この手紙とともに、同「評論」誌に掲載された編集者「P氏のリルケ追悼文の紹介もしている。

それによると、「筆者（J.P氏）は詩人が既に危篤の状態にありながら、医者⁽¹²⁾の死ではなしに、彼自身の死を死ぬことを欲して、遂に

一切の注射を拒絶したといふ挿話を引いて、大いに驚嘆してゐる⁽¹²⁾」。「マルテの手記」において固有の死を賛美した詩人が、みずからこれを実践したものと考えなければならぬ。

☆「リルケ書翰（ロダン宛）」

一九三五年（昭和十年）「四季」六月号（リルケ研究号）。「堀辰雄全集 第四卷」二七九ページ―二八〇ページ。

リルケは一九〇三年、ついに「ロダン論」を書き上げた後、イタリアのヴィアレジオ村に赴いて（三月）、静養する。そして彼は、この静養地からロダン宛てに二通の手紙を書く。最初の手紙（三月二十七日付）は、「ロダン論」ができ上がったので、当時パリに滞在していた妻クララにロダンのもとへ届けさせる旨の手紙。ロダンはこの手紙にたいして慇懃な礼状（四月六日付）を出したらしい。堀辰雄の訳出した手紙は、これにたいするリルケの返事です。

日付と発信地は、一九〇三年四月二十五日、イタリア ヴィアレジオ（ピサ近郊）、オテル・フロオランスにて。この手紙のなかで、「私にとつては永久に失ひたくない祖国にも等しい、貴方の恩恵を、何卒、私にお守り下さいますやうに、⁽¹⁵⁾」と師ロダンに敬服する言葉が印象的です。

☆「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」（ビアンキイ）」

一九三五年（昭和十年）「四季」六月号（リルケ研究号）。「堀辰雄全集 第四卷」二八一ページ―二八二ページ。

„Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph

Rile⁽¹⁶⁾「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」(一九〇六)は、リルケの書いたバラード風の小叙事詩でして、クリストフ・リルケの戦場における悲壮な死を歌ったものです。堀辰雄はこの作品も翻訳していますので、これについては後述しますが、この小叙事詩を読んで感激したジュヌヴィエヴ・ビアンキイという女性がこの作品を解題したものです。その堀辰雄訳ですから、「J」が付きます。

☆「リルケ」年譜

一九三五年(昭和十年)「四季」六月号(リルケ研究号)。「堀辰雄全集 第四巻」二二二ページ〜二二〇ページ。

筆者はこれを富士川英郎氏の作成された「リルケ年譜」⁽¹⁷⁾と比較対照してみました。その結果、全体的に見て、堀辰雄の作成した「年譜」は略年譜の感じを否めません。リルケの作品と翻訳はほとんど網羅されていますが、幾多の外国旅行を試み、外国でどういう人たちに会ったか。この辺について省略が多く、富士川氏のそれとはちがって、月日がほとんど記載されていません。

ただし、堀辰雄の「リルケ」年譜にはユニークな特徴もあります。それは、「エレン・ケイ宛書簡」、「ロダン宛書簡」、「サロメ宛書簡」、「タクジス公爵夫人宛書簡」、「ヴァレリイ「リルケ頌」、タクジス公爵夫人「回想のリルケ」、さらに自著「貧困と死の書」からの直接引用文が挿入されて、年譜の読者を感情的に動揺させる効果を上げている点にあります。

たとえば、一九一〇年、「マルテの手記」を刊行したとき、サロメに宛てた書簡を引用して、「……私は私の全財産をこんな物に徒費す

るやうな莫迦げた事をしてしまいましたが、一方、この物の価値はかかる私の破産からのみ生じたのでありません。」⁽¹⁸⁾

☆「夢 第七夜」

一九三六年(昭和十一年)「四季」一月号。「堀辰雄全集 第四巻」二二一ページ〜二二三ページ。原典は「Aus dem Traum-Buch. Der siebente, elfte und sechsundzwanzigste Traum. Der siebente Traum.」

「夢の書」から「第七、第十一と第二十六の夢」⁽¹⁹⁾が抜粋された形式になっているけれども、実際にはこの三つの夢の物語がリルケの「夢の書」のすべてです。このなかの「第七の夢」だけを堀辰雄が全訳したもので、主人公の少年は夢のなかで少女をさがしながら、星のことを考える。田舎の空にはいろいろな星が輝くの、都会には星が少ない。星はほんとうは人間の目ののだから、夜は昼間の疲れから回復しなければならぬ。ところが、都会では大勢の人々が心配したり、泣いたり、笑ったり、読書したり、夜更かししているの、回復する余裕をもてない……。

☆「ランプの下で(冬)」

一九三六年(昭和十一年)「四季」三月号。「堀辰雄全集 第四巻」二二六ページ〜二二七ページ。原典は「Hiver.」⁽²⁰⁾。

リルケがフランス語で書いた即興詩「冬」を堀辰雄が全訳したものの最後の聯に、「さうして樹々は、自分たちの家で、ランプをつけながら仕事をしてゐた……」とあるところから、標題がつけられた

と考えられる。

☆「トレドの風景」

一九三八年（昭和十三年） 随筆雑誌「三十日」二月号。「堀辰雄全集 第五巻」一六〇―一六二ページ。

一九〇八年十月十六日付、巴里ヴァレンヌ街七十七番地よりリルケがロダンに宛てた手紙の全訳。トレドはスペインの一地方名。リルケはある展覧会の席で、グレコの描いた「トレドの風景」の前に釘付けになる。それはトレド草原を襲った稲妻、落雷、驟雨が地上を掘り返し、揺すぶり、緑色の灌木を炎に染める風景画。芸術家はこの風景のような激しい夢をもつべきでないか、とリルケはいう。

☆「さらにふたたび」

一九四六年（昭和二十一年）「胡桃」七月（夏季）号。「堀辰雄全集 第八巻」九九ページ。出典未詳の短詩。

☆「旗手クリストフ・リルケ抄」

一九四六年（昭和二十一年）「高原」八月（第一輯）。「堀辰雄全集 第八巻」一〇〇ページ―一三三ページ。原典は、*Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke*。(22)（旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌）。

堀辰雄は原典の抄訳ではなく、全訳をしている。その上、タクジス公爵夫人が『回想のリルケ』のなかで、リルケはこの叙事詩を「ごく軽い抑揚をつけただけで、いつも殆ど夢のなかでのやうに、朗読

しました」という解説まで付けている。

「騎（の）りつつ、騎りつつ、……」で始まる叙事詩は、旗手クリストフ・リルケが誇らかに敵陣深く入りこみ、四面楚歌のなか、敢えなく戦死し、これを見て一人の老婦人が泣く。ここまでの戦場の旗手としての生活。そこには敵地の女性との愛もあり、婦人からもらった薔薇の花びらも手紙もある。

☆「ドウイノ悲歌」

一九四六年（昭和二十一年）「四季」八月号。「堀辰雄全集 第八巻」一一七ページ―一二三ページ。

リルケの作品をポーランド語に翻訳したヴィトルト・フォン・フレイイチの質問に答えたリルケの手紙のなかで、「ドウイノ悲歌」に関する部分だけの翻訳。一九二五年十一月十三日付のこの手紙のなかで、特に注目すべきは次の一節です。

『悲歌』と『ソネット』とは絶えず相互に支え合つてをります。――そして私は、それら二つの帆を、ひとつ息でもつて、膨らますことができたといふ事のうちに限りない恩寵を認めます。『ソネット』の錆（さび）いろをした小さな帆と、『悲歌』の眞白な大きな帆とを。(25)

この文言はまぎれもなく、私たちが「リルケ・ノオト」の「最初の二つの悲歌」のなかに見た文言と同一です。「ノオト」においてすでにこの手紙の試訳はなされていたと見なければなりません。

☆「詩集『怒』」

発表年月・誌名未詳。後に河出書房版「雉子日記」に収められる。
「堀辰雄全集 第五巻」一九六ページ―二〇三ページ。原典は、*Les Fenêtres*。(27)

原典の詩集「窓」は窓を主題にした十篇の詩を集めたもので、そのおのおの一枚ずつ挿絵が入っている。そのいずれも、リルケのバリ滞在中、その窓の下を通りすがりに垣間見た窓の内側の人生だの、あるいはその窓の内側の女性と持ち合ったはかない交渉だのをフランス語で歌ったもの。この詩集の全訳についてはすでに取り上げました。(28)ここでは詩集「窓」I-Xの抄訳が解説付でなされています。

☆「ジャム、君の家は」

発表年月・誌名未詳。後に角川書店版「薔薇」に収められる。「堀辰雄全集 第八巻」一五〇ページ―一五一ページ。

「マルテの手記」の一節に、山のなかの静かな家で花や小鳥や書物を相手に幸福な生活をしている一人の田園詩人が登場する。その詩人の名はフランス・ジャム。一八九九年のある日、ジャムの家へ最初の客として訪ねた詩人シャルル・グランが、ジャムの隠棲生活を讀えて一編の詩を捧げる。その詩の断片を堀辰雄が翻訳したもので、次の言葉で始まる。

「おお、ジャム、君の家は君の顔そつくりだね。
薦の髭(ひげ)がからんで、松の木がそれを覆(おほ)うてゐる。……」

注

- (1) 本稿 一一八ページ参照。
- (2) INSEL-VERLAG. hrsg. v. Rilke-Archiv. „Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke.“ 6. Bd. S. 709. ~ 966.
- (3) *ibid.* 2. Bd. S. 585. ~ 591.
- (4) INSEL-VERLAG. hrsg. v. Ruth Sieber-Rilke u. Carl Sieber. „Rainer Maria Rilke. Gesammelte Briefe in 6 Bdn.“ 1. Bd. S. 360 ff.
- (5) *ibid.* 1. Bd. S. 262. ~ 263.
- (6) *ibid.* 1. Bd. S. 265. ~ 268.
- (7) *ibid.* 2. Bd. S. 114.
- (8) *ibid.* 2. Bd. S. 115. ~ 116.
- (9) 「堀辰雄全集 第四巻」一九九ページ。
- (10) 同右 二〇〇ページ。
- (11) 同右 同ページ。
- (12) 同右 二〇六ページ。
- (13) „Rainer Maria Rilke. Gesammelte Briefe in 6 Bdn.“ 1. Bd. S. 321. ~ 322.
- (14) 原典未詳。
- (15) 「堀辰雄全集 第四巻」二八〇ページ。
- (16) „Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke.“ 1. Bd. S. 233. ~ 248.
- (17) 「リルケ全集 第十四巻」二二五―二二六ページ。
- (18) 「堀辰雄全集 第四巻」二二六ページ。
- (19) „Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke.“ 6. Bd. S. 989. ~ 991.
- (20) *ibid.* 2. Bd. S. 612.
- (21) 「堀辰雄全集 第五巻」一六一ページ。
- (22) 注(16)と同所。
- (23) 「堀辰雄全集 第八巻」一〇二ページ。

- (24) 同右 同ページ。
- (25) 同右 一一九ページ。
- (26) 本稿 一〇九ページ参照。
- (27) 注(3) と同所。
- (28) 本稿 一二二ページ参照。
- (29) 「掘辰雄全集 第八巻」一五〇ページ。

(三) リルケに関するエッセイ

(一) において、掘辰雄が翻訳したリルケの作品や手紙。あるいは、これに若干の解説を添えて発表したものを見てきました。これらはいずれも、リルケの原典が主体になっています。ところが、この(三)においては、掘辰雄の生活と文学遍歴を主体にして、リルケに関することが少しでも出てくるエッセイを「掘辰雄全集」のなかから、ピックアップしてみました。(二)と同様にこれを発表年月順に見て行きます。

☆「スタヴロギンの告白」の譯者に

一九三四年(昭和九年)「作品」七月号。「掘辰雄全集 第四巻」一〇〇ページ—一〇二ページ。

「スタヴロギンの告白」の訳者とは神西清のこと。神西がこの訳書の新刊批評に代える文章を何か書いてほしい、と掘辰雄を訪ねた夜、掘はリルケの「M・L・ブリッゲの手記」を訳している最中だった。雑誌「四季」に発表するために。ジイドは「M・L・ブリッゲ

の手記」を仏訳し、リルケは「放蕩息子の帰宅」を独訳して、両詩人の間柄には微妙な接点がある、といわれる。

☆「ハインケが何處かで」

一九三四年(昭和九年)「文芸」九月号。「掘辰雄全集 第四巻」一一四ページ—一二七ページ。

ハインケがどこかで、ドイツ語は詩の言葉としては一番美しいと言っている。自分(掘辰雄)もいま、「マルテの手記」を読んでいるが、辞書を使ってこういうドイツ語の本を読むときはど愉快なことではない。この本は、デンマークの落魄した貴族マルテがパリに出て、街の貧困や病苦と戦いながら、まったく一人だけで暮らすドキュメントである。が、その骨子を成すものはもちろん、パリに滞在した当時のリルケ自身の生活経験である。

☆「高原にて」

一九三四年(昭和九年)十月。岩波書店版「芥川龍之介全集月報」第一号。「掘辰雄全集 第四巻」一四七ページ—一四九ページ。

芥川は北欧の文学をかなり愛読していた。そして軽井沢から追分村までに点在している氷室の建物が大へんお気に入りだった。リルケはスカンジナビアの文学に傾倒した詩人であるが、「マルテの手記」を読んでいると、「凄惨な感じのうちに一脈の云ひしれぬ *swedness*」⁽²⁾を感じる。この感じが芥川の「齒車」を思い浮かべせる。スカンジナビアの要素が両氏の作品に共通して存在するのだろうか。

☆『鎮魂曲』

一九三六年（昭和十一年）「文芸懇話会」十二月号。「掘辰雄全集 第四卷」二五七ページ～二六一ページ。

昨夜、自分は山の宿で、J・B・レイシュマンの英訳したリルケの「鎮魂曲」（レクキエム）を読んだ。この二百七十行もある連作体の長編詩は、海がその深みを増せば増すほどその青みを増すように、詩をいよいよ積み重ねることによって、その心情の凄味を増す。何ともいえない「清冽な光線」が詩句から発せられて、それが天折した画家パウラ・ベッカーの死の姿を彷彿させる。

☆「山茶花など」

一九三七年（昭和十二年）「新女苑」一月号。「掘辰雄全集 第五卷」一五一ページ～一五九ページ。

掘辰雄の宿泊しているホテルにある日、一人の女性が訪ねて来る。年齢はまだ二十三歳だけれども、すでに身も心も傷ついている。このまま修道院に入らずに、どうしても幸福になれるでしょうか、と彼女は尋ねる。初対面でその経歴も知らない女性からの突然の問いかけに、掘辰雄は当惑する。ホテルの暖炉に背を向けて寄りそいながら、リルケの言葉がふと彼女の悩みを救ってくれそうに浮かんでくる。「苦悩から多くのものが生れるが、それがまたその苦悩をば癒す⁽³⁾」という言葉である。

やがて二人で外人墓道を散歩したとき、そこに一本の山茶花が目立たない花を簇がらせているのを見たところから、この題名がつけられる。

☆「雉子日記」

一九三七年（昭和十二年）一月「都新聞」二十五、二十六、二十七日に連載。「掘辰雄全集 第五卷」五十三ページ～五十八ページ。雪深い浅間山の麓の追分の宿で越冬したときのこと。軽井沢に三軒の雑貨店が冬の間も開いているので、体半分が雪のなかに入りそうになりながら、出かけて行く。と、いきなり道端から雉子が飛び立ったりする。こんなに不便で寂しい寒村に自分はどうしてこんなに執着するのか。

リルケが「ドゥイノ悲歌」を書いたシャトオ・ド・ミュゾットのあるシエルという村。それはロオヌ河畔の寒村で、汽車は素通りしている。ああいふ旅行者にとつては、取るに足りないやうな寒村が、かへつて詩人にとつては仕事をよく實らせて呉れるのかも知れない⁽⁴⁾。掘辰雄の体験から生じた感想でもある。

☆「續雉子日記」

一九三七年（昭和十二年）二月「帝國大学新聞」十五日号。「掘辰雄全集 第五卷」五十九ページ～六十一ページ。

私（掘辰雄）は空気銃を手にして、雪深い森のなかを歩きまわっているうちに、とうとう風邪をひいて寝こんでいる。私がいつかスイスに行けるようになったら、何よりも先に、ミュゾオの館と、リルケの墓のあるラロンの村を訪れたい。しかし今はそれよりも、とつくに買いこんである本、「ドゥイノ悲歌」を何とかして克服しなければならぬ。

☆「(雉子日記)ノオト」

一九三七年(昭和十二年)「四季」五月号。「掘辰雄全集 第五卷」七十三ページ―七十四ページ。

「雉子日記」のなかで、掘辰雄はしばしば「ミュゾオの館」のことを書いているが、その読みかたの間違いについて富士川英郎氏から指摘があった。これはリルケ自身もタクジス夫人宛ての手紙のなかで望んだことであるが、Muzotではなく、Muzotteとフランス語で発音すること。したがって、その和訳を「ミュゾットの館」と訂正する。

富士川氏からの手紙には、もう一つの重要な教示がある。それによると、十六世紀の初め頃、この館にイザベル・ド・シュヴロンという女性が住んでいて、彼女は二人の求婚者の決闘死の後、自分も不遇の死を遂げる。そのためリルケは、彼女の眠りを妨げないように、ミュゾットの近くの墓地には自分を葬らないでほしい、と遺言する。リルケの墓地のあるラロンの村がローヌ河をずっと遡ったところにある所以である。

☆「閑古鳥」

一九三七年(昭和十二年)「新女苑」九月号。「掘辰雄全集 第五卷」九十八ページ―一〇五ページ。

〇村のホテルで私の書いた小説に出てくる私の少年時代の恋人。彼女が私の知らない間に結婚をして、若い母になって、しばらくして死んで行ったということを、聞き知ってからもう大分たつ。それ

から数年後の夏、同じホテルに逗留した私は、彼女の姉がこの村のミッション・スクールで働いていることを聞く。この姉だけが私を私の失った者に結びつけてくれる唯一の生者だ。今のうちに一度この人に会っておきたい。閑古鳥の啼く林のなかの山道を歩いて、私はその人の所へ向かう。ところが、そのミッション・スクールに到着したとき、会うことに躊躇してそのまま引き返す。

「われは死者をもてど、彼等をして去るがままにす……」⁽⁵⁾

死者は私たちから静かに立ち去って行くがままにさせよう。死者の裡に生への郷愁をかき立て、生者の悲しみや苦しみに立ち入らせろことは、罪深いことだ、というリルケの死者にたいする考えに共鳴した行為でないだろうか。

☆「夏の手紙」

一九三七年(昭和十二年)「新潮」九月号。「掘辰雄全集 第五卷」九十一ページ―九十三ページ。

本来は昭和十二年七月二十五日付、信濃追分にて、立原道造宛てに書いた手紙ですが、「君にだけ読ませるのでは勿體ないから、『新潮』に随筆としてもつと書き加へて送ることにした」というはがき(同年同月二十六日付)⁽⁶⁾がある。したがって、これは立原道造宛ての手紙の文体をしたエッセイです。

立原道造から寄贈された詩集「萱草に寄す」⁽⁷⁾に敬意を表してから、話題はカプスという詩人に転じる。掘辰雄が頃日、京都の獨逸文化研究所に〇君を訪ねたときのこと。その応接間で何気なくドイツの新聞をめくっていると、その新聞に毎号絵入小説を連載している

作者の名前と写真が紹介されている。それが紛れもなく、リルケから「若き詩人への手紙」を十通も受け取っていたカプスだったので

「外部から来るかも知れない報酬のことは決して問題にしないで、芸術家の運命を、運命の重さと偉大さを耐え忍びなさい」(パリ、一九〇三年二月十七日)。¹⁰⁾

こう言ったリルケの貴重な忠告を無視して、カプスは今、通俗の領域に墮している。リルケからあんなに素晴らしい手紙をもらったカプスはむしろ、そのまま世に知られぬ生活に埋もれてしまった方が「若き詩人」の悲劇らしく奥ゆかしい。「僕はそれ(新聞)を拾ひ読みをして見ようなんていふ好奇心すら起らず、ただなんだか胸の痛くなるやうな気がしたばかりだった」と堀辰雄は悲嘆する。

☆「リルケは大戦當時……」

一九三七年(昭和十二年)「文芸」十月号。「堀辰雄全集 第五卷」

二〇八ページ。

「リルケは大戦當時終始沈黙を守つてゐたやうです。やはりさうするのが一番いいのではないかと考へます。カロッサは『ルーミア日記』など書いてゐますが、あれも大戦が終り、それについてあらゆる騒がしい戦争文學が氾濫したあとで、静かに現れました。本當の文學といふものはさういふ風にしか生れぬものだと思ひいたして居ります。」「(巻頭言)の全文」¹²⁾

☆「卜居」

一九三八年(昭和十三年)「知性」六月号。「堀辰雄全集 第五卷」一七六ページ―一七九ページ。

「マルテの手記」のなかに、リルケがフランスの田園詩人フランシス・ジャムの生活を羨む描写がある。

「ああそれは何といふ幸福な運命であらう。先祖代々の家の、物静かな部屋に坐つて、家付の落ちついた家具に取圍まれながら、まぶいしほどの新緑の庭で山雀が啼きかはしたり、又、遠くの方で村の時計の鳴るのを聞いたりしてゐるのは。さうやつて坐つて、午後の温かな日ざしを眺めながら、昔の少女たちの話を澤山知つてゐて、そしてしかも詩人であるといふのは。」¹³⁾

こんなフランシス・ジャムのような生活になりきれぬ日は、まだ遙かに遠い。が、いまだけは一番山奥の小屋を借りて、初夏も近いのにファイア・ブレスに火を焚き、そのそばには古い樫の木の子もあり、屋根裏部屋にはレムブランドの絵の入った額縁が壁にかけてある。その屋根裏部屋ではリルケを読み、階下の女房と共同の部屋ではシャルドンヌの「祝婚歌」や「クレエル」を読んで、結婚生活者の心理研究もする。こんな山の生活ではいろんな花々や犬にも事欠かない。

山小屋に卜居して満足した生活の近況について、友人、津村信夫宛てに書いた書簡体のエッセイです。

☆「七つの手紙 或女友達に」

一九三八年(昭和十三年)「新潮」八月号。「堀辰雄全集 第五卷」一八二ページ―一九五ページ。

「或女友達」とは昭和十三年に結婚した加藤多恵のこと。この前年の夏、堀辰雄は油屋で彼女と知り合って以来、文通がつづく。ただし、加藤多恵宛てのこの七通の手紙は実際に彼女に差し出した手紙そのものなのか。それとも、雑誌「新潮」に発表するために改ざんしたものなのか。堀辰雄の「書簡」（堀辰雄全集第九巻）収録のそれとこれとを対照して見るとき、筆者は後者だと判断せざるをえません。特に最後の十二月三十一日の手紙など、両者の内容は似ていますが、実際の手紙の方がずっと簡潔です。

この「七つの手紙」のなかでリルケについて書かれたことを拾ってみると、リルケが翻訳した「ぼるとがる文（ふみ）」（マリアンネ・アルコフオラド作）と「蜻蛉日記」には、不幸な女の日記としての相似点がある。この夏の油屋の火事によってリルケ関係の沢山の本やノオトを焼失したけれども、その代償のように「死のかげの谷」が完成した。今はタクジス公爵夫人の著「リルケの思ひ出」を読んで、「ドウイノ悲歌」を完結するまでの異常な労苦をつぶさに感得している。

☆「山日記 その一」

一九三八年（昭和十三年）「文学界」十月号。「堀辰雄全集 第六巻」七十四ページ―七十七ページ。

堀辰雄の山小屋の庇でゆうべ、蛇が脱皮して、脱け殻を残して行った。その日の午後、来訪した阿比留君は、こんな山住まいではそんなことは有りきたりの出来事で、自分の山小屋の屋根裏には蝙蝠が棲まっていたこともあるという。それからしばらく二人は黙って暖

爐の火を見まもっていたが、やがて堀の唇をついて、リルケの「ドウイノ悲歌」中の一句が浮んできた。

……Wie vor sich selbst erschreckt, duschnecks die Luft, wie wenn ein Sprung durch eine Tasse geht. So reißt die Spur der Fledermaus durchs Porzellan des Abends.⁽⁹⁾

（蝙蝠は自分自身を怖れるかのやうに、空中にはためき出る。さうして茶碗に罅が入るやうな具合に、蝙蝠は掠め過ぎる。磁器に似た夕闇を横切つて）⁽¹⁷⁾

☆「マルテの手記」

一九四〇年（昭和十五年）二月十六日「東京新聞」。（著者の生前には単行本に未収録。）「堀辰雄全集 第九巻」三三九ページ―三四〇ページ。

リルケは「生」の問題を最後まで考え、最後まで見極めようとして、彼の分身マルテをその「生」の最もぎりぎりのところに終始立たせた。しかしリルケは「生きることの不可能なことを殆ど証明するに了つたかに見えるこの本は、この本自身の流れに逆ひつつ讀まなければならない」⁽¹⁸⁾と友人への手紙にいう。

☆「伊勢物語など」

一九四〇年（昭和十五年）「文芸」六月号。「堀辰雄全集 第六巻」一六八ページ―一七二ページ。

「伊勢物語」のなかに、自分ゆえに死んでいった女の棺の前で、男はその魂を鎮めるため

に音楽などをしてその宵を過ごす、という意味の歌がある。

「萬葉集」のなかには、

不幸な若い女の死を哭し、魂を鎮めるためにはあくまでもその死者の心と一つになりきらずにはおられない、という歌がある。

そして、リルケの「ドゥイノ悲歌」の一節には、

「昔、リノスの天折のための慟哭が、

凍えついたやうな虚無を貫いて、

はじめて音楽となつたといふ……」⁽¹⁹⁾

このように詩歌や音楽の発生が、神に似た夭折者たちを哭し、その魂を鎮めるためであつたという考えは、東西軌を一つにしているらしい。

☆「一挿話」

一九四〇年（昭和十五年）「文化評論」六月（創刊号）。「堀辰雄全集 第六巻」一七六ページ―一七九ページ。

一九〇八年の春、イタリアのカプリ島に療養していたリルケは、五月に四たびパリにもどつて来る。「新詩集別巻」(「新詩集第二部」)⁽²⁰⁾を完成するためにです。当時すでにロダンとの不和は完全に和解していません。八月末脱稿した「新詩集別巻」は、「わが偉大なる友オオギュスト・ロダンに捧ぐ」と献辞を印刷して、ロダンに献呈されました。

この後、仕事場をヴァレンヌ街のホテルに移して、リルケは数年前から計画していた「マルテの手記」に取りかかるのですが、その部屋にはあいにく原稿を並べられるような卓子がない。そこでリル

ケはロダンに手紙を書いて、適当な卓子があつたら拝借願えないかと無心する。ロダンはこれに快く応じて、すぐに立派な卓子が届けられる。したがって、「マルテの手記」はロダンから借りた卓子の上で書かれたのだ、という一挿話です。

☆「或外國の公園で」

一九四〇年（昭和十五年）「知性」六月号。「堀辰雄全集 第六巻」一七三ページ―一七五ページ。

「或外國の公園」とはスウェーデンの Borgeby-Gård という公園のこと。一九〇四年にリルケがボルゲビィ・ガアルに滞在したときに作つた詩が標題の詩で、「新詩集」のなかに収められている。⁽²²⁾堀辰雄はこの詩の大意を訳してから、「死の考へが生きんとする欲望を暗くしてゐるやうな、まだいくぶん感傷的な青年の姿には、しかし充分に後の日のマルテの悲痛なる姿を彷彿せしめるものがある」⁽²³⁾と感想を述べている。

☆「心の仕事を 或未知の友への手紙」

一九四一年（昭和十六年）八月。後に角川書店版『薔薇』に収められる。「堀辰雄全集 第七巻」二四五ページ―二四六ページ。「ドゥイノ悲歌」について或未知の読者から寄せられた質問にたいする返信。質問の要旨は、「ドゥイノ悲歌」におけるロダンの彫刻の連想を確かめようとしたものですが、堀辰雄は直接の返事に代えて、

Werk des Gesichts ist getan.

tun nun Herzwerk.

目の仕事は仕遂げた、
これからは心の仕事をしよう……⁽²⁴⁾

というリルケの詩を引用し、「新詩集」のような「目の仕事」ではなくて、「ドワイノ悲歌」においては「心の仕事」としての世界が創られている。ただし、その形象が彫刻的な美しさをよび起こしただけに止まっていはいけない。「それはもつと君を人間の悲しみといふものの本質に導いて行かなければならない」と忠告する。⁽²⁵⁾

注

- (1) 「掘辰雄全集 第四巻」一〇一ページ。
- (2) 同右 一四八ページ。
- (3) 「掘辰雄全集 第五巻」一五三ページ。
- (4) 同右 五十六ページ。
- (5) 同右 一〇三ページ。
- (6) 「掘辰雄全集 第九巻」九十四ページ。
- (7) 庄野潤三ほか編「日本詩人全集二十八」(新潮社、昭和四十三年)一二五―一二九ページ。
- (8) 大山定一氏のこと。
- (9) 富士川英郎ほか訳「リルケ全集 第十巻」(弥生書房、昭和四十年)五ページ―四十九ページ。
- (10) 同右 十ページ。
- (11) 「掘辰雄全集 第五巻」九十二ページ。
- (12) 同右 二〇八ページ。
- (13) 同右 一七七ページ。
- (14) 同右 一九三―一九五ページ。
- (15) 「掘辰雄全集 第九巻」一一七―一九ページ。

堀 辰雄 管見 上野英雄

- (16) 「掘辰雄全集 第六巻」七十五―七十六ページ。原典は「INSEL-VERLAG. Hsg. v. Rilke-Archiv. Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke. 1. Bd. S. 716.

- (17) 「掘辰雄全集 第六巻」七十六ページ。
- (18) 「掘辰雄全集 第九巻」三三九―三四〇ページ。
- (19) 「掘辰雄全集 第六巻」一七〇ページ。
- (20) „DER NEUEN GEDICHTE ANDERER TEIL “in, Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke. 1. Bd. S. 555-642.
- (21) „A mon grand Ami Auguste Rodin “(a. a. O. S. 556.)
- (22) „IN EINEM FREMDEN PARK—Borgeby-Gård—“ (in „ Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke. 1. Bd. S. 517.)
- (23) 「掘辰雄全集 第六巻」一七五ページ。
- (24) 「掘辰雄全集 第七巻」二四五ページ。
- (25) 同右 一四六ページ。

(四) 師友知人あての書簡

本章において見てきた(一)掘辰雄の「リルケ・ノオト」はすべて執筆年代未詳。(二)と(三)は二、三の例外を除いて、発表誌・発表年月が明示されているので、その発表年月順に翻訳、エッセイ等を列挙して、その内容を要約しました。しかし、掘辰雄が三十歳のときからリルケを読み始めて、昭和二十八年、病床で枕もとのリルケ関係の本の「匂いを嗅いで」⁽¹⁾死んで行くまでの人生と交友関係を考えると、師友知人あての書簡が重要な資料になります。したがって、掘辰雄の「書簡」(掘辰雄全集 第九巻)から師友知人に宛

てたりルケ関係の書簡を年代順に観察し、これをもって筆者は「ルケへの愛着と研究」の章の締めくくりとする。

☆昭和十年（一九三五年）

三十二歳

○「マルテの手記」を訳しているけれども、そろそろ貴兄に代わってもらいたい。（二月二日 富士川英郎宛）⁽²⁾

○「四季」五月号をリルケ特輯にするので、「マルテの手記」の他に「新詩集」からの翻訳四、五篇をお送り下さい。その他、サロメの「リルケの思ひ出」の紹介のようなものも欲しい。（三月十七日 富士川英郎宛）⁽³⁾

○ヴァレリーの「リルケ論」も誰かに訳してもらいたい。（三月十九日 富士川英郎宛）⁽⁴⁾

○ビアンケイという女の人の書いた「リルケ論」を読んでいる。（三月十九日 矢野綾子宛）⁽⁵⁾

○リルケ特輯は六月号に延ばすことになりました。（四月九日 富士川英郎宛）⁽⁶⁾

○「新詩集」の訳、もっとありましたら、お見せ下さい。（四月十四日 富士川英郎宛）⁽⁷⁾

☆昭和十一年（一九三六年）

三十三歳

○僕がお手本にしたいと思っているのは相変わらずリルケです。（十二月十八日 葛巻義敏宛）⁽⁸⁾

☆昭和十二年（一九三七年）

三十四歳

○「僕のあの一文はJ. F. Angelozといふ人が最近フランスで出した、Rainer Maria Rilke」といふ本を漫讀してゐるうち、たまたまあのシャトオやラロンの墓のことなど書いてあるのに興味をそられて、つい書いてしまったものです……あなたが話したザベルの話、たいへん嬉しくつて、数日楽しい思ひをしました……僕も一生のうちに『僕のリルケ』といったやうな小さな本を書くのを楽しみにしています 前述の Angeloz といふ人が『ドウイノ哀歌』の佛譯を試みたのを最近手に入れたので、ひとつこれからばつそれを手よりに原詩を讀んでやらうかと思つてゐます……（四月四日 富士川英郎宛）⁽⁹⁾

○京都にはリルケの好きな人がだいぶいて、リルケの話ばかりしている。（六月二十六日 京都にて 神西清宛）⁽¹⁰⁾

○「マルテの手記」に出てくるアベラールとエロイズの恋文を讀んだ。（八月三十一日 加藤多恵宛）⁽¹¹⁾

○リルケの翻訳した「ぼるとがる文」（マリアンナ・アルコフオラート）には「蜻蛉日記」の女性の気持ちと共通するものがある。（九月十二日 佐藤恒子宛）⁽¹²⁾

○十一月十九日、油屋全焼し、リルケの本を何もかも焼いて呆然としてゐる。（十一月二十四日 神西清宛）⁽¹³⁾

○日本橋の三越洋書部にインゼル・ビュッヘライというのがあるから、そのなかでリルケの「Marien Leben」（マリアの生活）と「Sonnette an Orpheus」（オルフェに捧ぐるソネット）を買って、今度の火災の記念としてプレゼントしてくれませんか。（十一月二十六日 加藤多恵・恩地三保子宛）⁽¹⁴⁾

○君のいろいろにあるリルケの“Requiem”をクリスマスまで拝借できないか。(十二月十四日 立原道造宛)⁽¹⁷⁾

☆昭和十三年(一九三八年)

三十五歳

○「マンズフィルドが病気で療養にいつてゐた瑞西の何とかいふところは、同じ頃リルケが晩年を送つて『ドワイノの悲歌』などを書いてゐたミュゾットのすぐ傍らしいです……近頃リルケに關する本がイギリスでもぼつぼつ出てゐる由、阿比留君にききましたが知つてゐますか?」(十月十五日 山下波郎宛)⁽¹⁸⁾

☆昭和十四年(一九三九年)

三十六歳

○リルケの原稿は「四季」にお送りした。(六月三十日 富士川英郎宛)⁽¹⁹⁾

☆昭和十六年(一九四一年)

三十八歳

○「去年の暮に白水社から貴兄の御譯業になる『神様の話』を送られました 巻末に添へられた年譜は殊に大へんな御努力だったらうと思ひますが小生などにはたいへん難有いものです」(二月十八日 谷友幸宛)⁽²⁰⁾

○VALERY・EUPALINOS(本文はヴァレリーの「ユウパリノス」のリルケの獨逸語譯)を持ってきて下さい。(八月七日 加藤俊彦宛)⁽²¹⁾

○「獨逸文化研究所へいつて大山定一君に逢つた、一しよに出町柳といふところにある古本屋にいつたら Louise Labéといふ十六世

紀のリヨンの女詩人のソネット集があつたので飛び上つてよろこんだ リルケが大好きでその二十四のソネットを獨逸語に譯してゐる位だ(これで京都まで出てきた甲斐があつた」(十月十六日 掘多恵宛)⁽²²⁾

☆昭和十七年(一九四二年)

三十九歳

○大山定一君の生徒で、リルケの「ドワイノ悲歌」を卒業論文に書いた人が軽井沢に私を訪ねて来た。夕方までリルケのことをいろいろと話し合つた。(十月四日 掘多恵子宛)⁽²³⁾

○終始興味をもつてリルケとゲオルゲの御高著を読了。「僕もリルケの小さな本が出したくなりました」(十二月二十三日 阪本越郎宛)⁽²⁴⁾

☆昭和十八年(一九四三年)

四十歳

○「リルケの詩集は只今小生のところには『新詩集』以後のものしかありません(みんな追分で焼きました)」(四月十九日 畑中良輔宛)⁽²⁵⁾

○「……さてこんど大山定一君などでリルケの手紙を五巻ほどに分けて譯す計畫があります大體いままでに

- | | | | |
|-----|-----------|-----|----|
| 第一巻 | ロゲン時代 | 掘 | 辰雄 |
| 第二巻 | セザンヌ書翰 | 大山 | 定一 |
| 第三巻 | 旅のたより | 谷 | 友幸 |
| 第四巻 | ミュゾットの手紙 | 高安 | 國世 |
| 第五巻 | 續ミュゾットの手紙 | 富士川 | 英郎 |

といった計畫が立ちました本屋は甲鳥書林です就いては君にも是非お引受け願ひたいものです」(四月三十日 富士川英郎宛)⁽²⁶⁾

○「こんど『窓』を譯してみ、この位辛抱つよく『ドウイノ哀歌』などに嚙りついて何んとか自分のものにしたいやうな野心さへ起つて來ました」(六月十七日 河盛好藏宛)⁽²⁸⁾

○僕はこの夏はブルースとリルケを読んで暮らした。(八月二十八日 野村英夫宛)⁽²⁹⁾

☆昭和十九年(一九四四年)

四十一歳

○「ドウイノの悲歌」を皆でお読みになっている由にて大変うらやましい。小生もこんど追分でドウイノの仏訳を読むつもりで、友人に貸してあったその本を返してもらったところです。(五月二十五日 大山定一宛)⁽³⁰⁾

○「リルケ書翰集續刊當分お見合はせの由、承知いたしました、その方の小生の仕事もかなり進捗してをりまして(友人に頼んだ下翻譯は大半完了)随分がっかりしましたが、いづれこれはきつと續刊の見込みも立つやうになるだらうと信じて、出来るだけ進捗させておくつもりです」(七月十五日 中市弘宛)⁽³²⁾

○「冬になつてからは又リルケに立ちかへつて 秋讀んだ佛蘭西の詩などと考へ合はせながら、詩をおもに讀んでゐる」(十二月二十八日 葛巻義敏宛)⁽³⁴⁾

☆昭和二十年(一九四五年)

四十二歳

○リルケの「Elegien」を読むことは「長い、骨の折れる仕事」だか

ら、いまは読みたくても読めない。秋になって、もっと身心爽快になつてから、と思つてゐる。(八月二十七日 葛巻義敏宛)⁽³⁵⁾

○リルケ全集の出版はぜひやつてもらいたい。「が、全集といふからには詩を主にしなく、その詩の翻譯——ことに彼の最もよき晩年の詩の翻譯がすこぶる問題です。『ドウイノ哀歌』や『オルフォイス』その他の晩年の詩は、翻譯と一緒に、是非その註釋や解説のできるだけ精しいものを添へて出さなければ分かり難いでせう。先ずさういふ仕事を大山君とか富士川君などに……やつて貰ふのですな。さういふ見透しがついた上で、全集を考へてみる事です」(十一月二十一日 角川源義宛)⁽³⁶⁾

☆昭和二十一年(一九四六年)

四十三歳

○リルケの手紙のまだ残つてゐる分、ぼつぼつでいいから、訳しておいてくれないか。(二月十三日 森達郎宛)⁽³⁷⁾

○近在の知人たちといつしよに「高原」という季刊誌をはじめ、僕はリルケの「旗手」を訳した。(三月七日 神西清宛)⁽³⁹⁾

○「……いま『四季』のために リルケの手紙を譯してゐますが難しいものです アンゲロースは譯して御覽なさい 彼の『悲歌』の解釋はいいものです」(四月二十七日 遠藤周作宛)⁽⁴⁰⁾

○「四季」創刊号において僕はリルケの「ドウイノ悲歌」についての重要な手紙を訳した。(五月二十五日 小山正孝宛)⁽⁴¹⁾

○「(四季)第一號にはリルケの『ドウイノ悲歌』について Hulewicz に宛てた手紙を僕が譯して載せました 間違ひのおほいことと思ひますから、どうぞ又御教示下さい」(六月十一日 大山定一宛)⁽⁴²⁾

☆昭和二十六年（一九五一年）

四十八歳

○リルケがメルリイヌという閨秀畫家に与えた手紙を読んだ。（四月九日 神西清宛）⁽⁴³⁾

○リルケの「大戦中の手紙」の御訳をありがとう。「メルリイヌといふのは『窓』の挿絵をかいたりしてゐる Baladine⁽⁴⁴⁾といふ女流畫家ではないですか」（四月二十一日 富士川英郎宛）⁽⁴⁵⁾

○「リルケの最後の女友達」という本を買っておいでくださいな。

（七月一日 矢内原伊作宛）⁽⁴⁶⁾

○「メルリイヌとバラデインと同一人の由、ぼくのあてづつ法があつたやうですね、リルケの女友達といふのはみんな一風變つてゐるやうですね」（七月八日 富士川英郎宛）⁽⁴⁷⁾

☆昭和二十七年（一九五二年）

四十九歳

○この正月には Bollnow の書いた「リルケ論」が届いた。（一月七日 矢内原伊作宛）⁽⁴⁸⁾

○「こんどのリルケ選集に小生の譯（旗手）をお入れ下さる由、承知いたしました……最近リルケに關する本数冊入手、しかし困臥の日多く殆ど讀書できません」（五月七日 富士川英郎宛）⁽⁴⁹⁾

○「* Lou Albert Lasard : Wege mit Rilke.

(Fischer Verlag)

* Rainer Maria Rilke und die Bildende Kunst.

(Kunstwerk-Schriften Band 24)

以上の二點もしまだ品切れでありますでしたらお送り下さいま

せんか

他にも何か Rilke 關係の新刊書が来てゐましたらお知らせ下さい
ば幸甚です」（八月二十六日 ゲーテ書房宛）⁽⁵⁰⁾

☆昭和二十八年（一九五三年）

五十歳

○「……昨秋はすこしばかりリルケ關係の本を読んだけどこのごろ晩年の詩——ことにフランス語の詩などが大分高く評價され出しているやうで面白い」（一月十三日 矢内原伊作宛）⁽⁵¹⁾

○「……近着のリルケ關係の本で枕もとにはぎやかだがときどき匂を嗅いでみるだけだ」（一月十七日 神西清宛）⁽⁵²⁾

注

(1) 「掘辰雄全集 第九卷」二九一ページ。

(2) 同右 七四ページ。

(3) 同右 七五ページ。

(4) 同右 七五ページ。

(5) 同右 七五ページ。

(6) 同右 七六ページ。

(7) 同右 七六ページ。

(8) 同右 八五ページ。

(9) 「續雄子日記」。本稿二二八ページ参照。

(10) 「雄子日記」ノオト。本稿二二九ページ参照。

(11) 「掘辰雄全集 第九卷」九一ページ。

(12) 同右 九二ページ。

(13) 同右 九六ページ。

(14) 同右 九七ページ。

- (15) 同右 一〇八ページ。
- (16) 同右 一〇八ページ。
- (17) 同右 一一五ページ。
- (18) 同右 一三六―一三七ページ。
- (19) 同右 一四六ページ。
- (20) 同右 一六三ページ。
- (21) 同右 一六六ページ。
- (22) 同右 一七―一七二ページ。
- (23) 同右 一九九ページ。
- (24) 同右 二〇六ページ。
- (25) 同右 二〇八ページ。
- (26) 同右 二〇九ページ。
- (27) 「窓」の翻訳については本稿二二二ページ参照。
- (28) 「堀辰雄全集 第九卷」二二二ページ。
- (29) 同右 二二四ページ。
- (30) 同右 二二五ページ。
- (31) この企画については本稿二三五ページ参照。
- (32) 甲鳥書林編集部の人。
- (33) 「堀辰雄全集 第九卷」二二七ページ。
- (34) 同右 二二三ページ。
- (35) 同右 二三〇ページ。
- (36) 同右 二三二―二三三ページ。
- (37) 同右 二三八ページ。
- (38) 「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」。本稿二二五ページ参照。
- (39) 「堀辰雄全集 第九卷」二四二ページ。
- (40) 同右 二四六ページ。
- (41) 同右 二五〇ページ。

- (42) 同右 二五六ページ。
- (43) 同右 二七八ページ。
- (44) この若い女流畫家の描いた「窓」の挿絵について、「いかにも素人らしく
つて、稚拙だ」(「堀辰雄全集 第五卷」一九六ページ)と堀辰雄はいう。
- (45) 「堀辰雄全集 第九卷」二七九ページ。
- (46) 同右 二八二ページ。
- (47) 同右 二八三ページ。
- (48) 同右 二八七ページ。
- (49) 同右 二八七ページ。
- (50) 同右 二八九ページ。
- (51) 同右 二九〇ページ。
- (52) 同右 二九一ページ。